シンポジウム企画運営に参加して

廣木　良司
NPO ア！安全・快適まちづくり　事務局

私は、東京都庁で 37 年間の仕事のうち、およそ 18 年の間、現場では江東治水高潮工事課長を始め三建、四建、五建、六建に勤務し、本庁では河川の計画課長、河川部長と河川関係の仕事を、亡くなられた石川金治さんから様々な薫陶を受けつつ携わってきました。

これは、二年前に NPO ア！安全・快適街づくりの事務局メンバーに加わらないかとお声掛けいただいた、ひとつの理由かなと考えております。

さて、昨年、成戸理事長から、カスリーン台風 70 年の節目で NPO でもシンポジウムを開催したいと考えており、その取り纏めと調整を私に指示されました。そこで開催に向け考えたことなど、少し記しておきたいと思います。

この NPO ア！安全・快適街づくりの設立には、色々と石川さんから情報を頂いておりましたが、当時から様々な分野で強みを持った人達が関わっているという印象がありました。さらに最近は、一層、地域との連携が進んだと感じました。

そして自分がこのシンポジウムの開催で最も腐心したのは、その強みを十分活かしきれば良いということでした。

この NPO は、東部低地帯の江戸川、足立などの区とも日頃からの付き合いが豊富ですし、特に葛飾区との関係は特筆するものがありました。また、石川先輩が加藤先生とコラボし始めたことも大きな転換点であったと思います。

そして、地元の町会長や地域にお住いの皆様との様々な共同作業や、大成化工（株）の支援も、この NPO の強みとなっています。

さらに継続して実施している輪中会議や出前授業など、様々な課題があっても、皆で議論し、地域の防災対応力を高めるという共通課題のもと、活動している皆様には頭が下がる思いです。

それらがあるからこそ、このシンポジウムは成功したとものと考えております。特に自分が何をしたわけではありませんが、これは大変良い経験となりました。ありがとうございました。

日本は世界の中でも災害先進国です。想定を超える災害は、間もなく終わる平成の時代だけでも何回起きたことでしょう。

実際に災害や事故に遭遇した時、自ら命を守る行動が取れるかは、日頃から、過去の事例で、どのような行動が必要であったかシミュレーションしておくことが大事と考えます。

個人個人のレベルだけでなく、これが世代を超え、地域の財産になればもっ

と良いと思います。故 石川金治さんの遺志を継ぐ、この NPO ア！安全・快適街づくりが、その源となれたらと思います。

さて、事務局が企画運営するにあたり、どのような協力を頂いたか、記録しておくのも大事な作業と思います。

まず、会場の選定にあたりましては、葛飾区の多大なご協力があってこそと考えております。参加人数の目安をつけて、会場確保の日程も敬老の日との関係から決めましたが、やはり、NPO のメンバーの経験値がモノを言ったと思います。

また、このシンポジウムの後援を頂く関係機関につきましても、ほぼ毎月一回開催する NPO の事務局会議で、これまでの経験を踏まえて議論し、内閣府、荒川下流河川事務所、東京都建設局、足立区、江戸川区から頂くこととしました。

ただ、内閣府の後援を頂くのは初めての経験でした。地域の限られた行事で後援を戴くのは結構ハードルが高く、主催である葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地研究会の定款や構成員などの説明を求められた他、印刷したチラシの事前確認や多角的な広報を行うなど様々な条件を付けられましたが、無事に後援名義を頂くことが出来ました。

そしてチラシの作成については、事務局会議での議論を踏まえて作成し、1,000 部印刷して、葛飾区や町会の他、ご後援頂く機関に置かせて貰いました。

また、東京都や国土交通省の旧運輸省系と旧建設省系の両方の記者室に配布した他、東京都建設局の東部低地帯にある出先事務所である一建、二建、五建、六建、江東治水、東部公園緑地事務所にも送付しました。

次に、シンポジウムに登壇するパネラーについてですが、日頃からお付き合いのある葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地研究会には、多士済々のメンバーがおられますし、出前授業などで協力いただいている東京大学生産技術研究所の加藤研究室の皆様や、国土交通省荒川下流河川事務所、葛飾区郷土と天文の博物館の協力もあって、すんなりと決まったと思います。

昨年は、カスリーン台風被災の 70 年と言う節目で、いくつかシンポジウムが開催されましたが、純粋に NPO レベルで企画運営したシンポジウムは、このシンポジウムだけであったと思います。ほぼ予定通り 200 名近くの方々に参加いただきました。

町会の皆様、また多大な協力をいただいた葛飾区役所の皆様、まことにありがとうございました。

第 11 回輪中会議開催にあたって

NPO ア！安全・快適街づくり　事務局

2018 年 3 月 25 日、下記の通り、第 11 回輪中会議を開催しました。

第１１回　輪中会議　2018

■日時：２０１８（平成３０年）年3月２５日（日）
14～17 時 輪中会議　（無料）
17～18 時 交流会　（５００円）

■場所：新小岩北地区センター （葛飾区東新小岩６丁目―２１－１）

■主催：葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会
※構成メンバー：新小岩北地区連合町会、NPOア！安全・快適街づくり、葛飾区、
広域ゼロメートル市街地研究会、認定NPO日本都市計画家協会

■今回のテーマ：親水・浸水×まちづくり×ひとづくり

浸水・親水も広く考え“水害リスクと賢く共生する親水都市”のイメージを共有することが期待される。浸水対応型市街地形成、また非常時も平時の暮らしも継続計画（LCCP）が必要だということも考えてみます。
一方、それぞれ自主的な取り組みの報告を受けて、広域ゼロメートル市街地における大規模水害に備えて、多様な活動（町会、小中学校、行政、NPO、企業、大学、専門家たち）からの経験・情報の共有を図り、意見を交わし、また連携します。
「親水・浸水×まちづくり×ひとづくり」地域人による新たな展開を期待します。

プログラム

■第 1 部：多様な活動報告　司会進行　塩崎

- 地域から
  @エンジン付きゴムボートが６町会に
  @6 月 10 日、中川で連合町会によるボート訓練予定
  @上小松町会による上平井中学校プールでボート訓練
  @西新小岩３丁目有志の勉強会
  @東新小岩７丁目町会「避難パンフレット」ほかいろいろ
- 小・中学校から
  @上平井中学校 2017 年度活動報告（地域防災ボランティア部）
  @出前授業の報告と次の展開
  @上小松小学校での展開「学校地域応援団」との連携
- 大学から
  @避難に関する住民ヒアリング調査の結果
- 行政から
  @内閣府から
  @葛飾区から
  @5 区協議会
  @新小岩公園の高台化に向けた状況は？
  @水陸両用車「ARGO」（「すい防」、「ちー防」）購入

@荒川下流河川事務所　近況報告

- **企業から**
  @大成化工がエンジン付きゴムボートを購入･町会との連携を期待
- **NPO から**
  @9 月シンポの報告
  @ニュースレター総集編企画

■第２部：親水・浸水×まちづくり×ひとづくり　司会進行　色田

- **大学・専門家から**
  @浸水対応型市街地形成について
  2010 年勉強会から今までの流れを共有しつつ、研究現況加藤さんから報告
  浸水対応型市街地のイメージは・・・。
  @親水事例の参考事例
  加藤研で収集したものからセレクト版

- 【意見交換】親水・浸水に向けて
  - まちづくり
  - ひとづくり

■配布資料

- これまでの取り組みと系譜
- 水害避難のパンフレット（内閣府＋東新小岩七丁目 WS の結果）

【これまでの経緯】　詳細「これまでの取り組みと系譜」をご覧ください

１５年余にわたって町会、NPO、専門家、大学、行政などが中心となって、大規模水害に備えるための様々な活動、研究をすすめてきました。2012（平成24）年度「新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」を組織。安全・快適まちづくり活動を広く地域に繋げ、交流、発展、創造の場として「輪中会議」を立ちあげ今回は第１１回目。経験を共有し、地域の未来を語らう。

平成 29 年度 第 11 回 輪中会議を振り返って

塩崎　由人
NPO ア！安全・快適街づくり
東京大学　加藤孝明研究室

2018 年 3 月に行われた第 11 回輪中会議では、色田彩恵さんとともに司会を担いました。今回の輪中会議にも、地域の町会、中学生、小中学校の先生、葛飾区、荒川下流河川事務所、内閣府、大学、NPO、企業等、多様な組織から大勢の参加者が集まりました。地域の方たちからの興味深い話題提供や熱のこもった意見が尽きず、第 1 部「多様な活動報告」の司会としては時間管理をしなくてはいけなかったのですが、もっと話を聞いてみたいという気持ちになり、予定の時間を大幅に超過してしまいました。

今回、司会をしながら感じたことは、地域での取り組みがますます発展しているということです。今年はついに新小岩北地区連合町会のすべての町会がエンジン付きゴムボートを使った訓練（6 月 10 日予定）に参加することになりました。すべての町会が参加するとなると、ボート訓練の風景もこれまで以上に迫力があるものになりそうだと今からワクワクしています。大成化工でもゴムボートを購入し、地域の町会に活用してもらうよう取り決めをしているそうで、地域での連携が一層強くなっているなと感じました。

上平井中学校・地域防災ボランティア部の活動報告にも驚かされました。輪中会議でも自主的なアンケートを配布し、今後、防災マップにのせるべき情報を収集していました。今後はどのように展開していくのか、来年の輪中会議での活動報告が今から楽しみです。

その地域防災ボランティア部 OB で、今は地域の消防団でも活躍する中村隆三さんからは、消防団にもエンジン付きゴムボートが配備されたという報告がありました。このゴムボートはエンジンの出力が大きいため、操船するには船舶免許が必要だということです。免許を取得した中村隆三さんは、消防団としての訓練だけでなく、プライベートでも船を借りて、クルージングを楽しみながら操船技術を磨いているそうです。このように操船技術を熱心に磨く人が増えてくると、地域の浸水対応力も高まるに違いないと感心しました。

以上の他に、行政からは対策や検討の進捗状況、大学院生からは研究報告などが行われ、情報と経験が共有されました。輪中会議での情報と経験の共有を契機に、組織や世代を超えた、新たな取り組みが生まれることを期待しながら、私自身も NPO、大学のメンバーとして、取り組みを継続したいと思います。

輪中会議の意味

色田　彩恵
東大加藤研究室　修了生

2017 年 9 月の NPO ア！安全・快適街づくりのシンポジウムに引き続き、今回の輪中会議でも司会を務めさせていただきました。今回のテーマとしては、地域に関わる様々な主体の「まちづくり」「ひとづくり」の成果をお互いに共有し、「水害リスクと賢く共生する親水都市」のイメージを膨らませる、という 2 点を念頭に臨みました。「水害リスクと賢く共生する親水都市」のイメージは、まとまった答えが出るものではないかもしれませんが、みんなで議論しながら、それぞれが活動を重ねていった結果としてできていく街や人、地域のつながりなどの全体が、この東京のゼロメートル市街地での「水害リスクと賢く共生する親水都市」になるのではないかと思っています。輪中会議が 11 回も開催されたということは、ゼロメートル市街地に関わる皆さんの活動が、それだけ長く継続されてきたということであり、改めて感嘆するとともに、こうした状況自体が「水害リスクと賢く共生する親水都市」の一部なのだろうと思いました。

今回は、上平井中学校の地域防災ボランティア部の皆さんから、自分たちの活動についてプレゼンテーションがありました。自分たちが行動したこと・感じたこと・考えたことを、自分たちの言葉で語ってくれたプレゼンテーションには、参加者の皆さんも刺激を受けたのではないでしょうか。

また、これまでの輪中会議に引き続き、多くの町会から参加者がいらっしゃいましたが、参加された全ての町会の皆さんからお話を聞くことが出来ました。中には、長い活動の中で、世代交代がされた町会もあったようですが、「輪中会議に参加して、これまでの活動について知ることができた」といったお声もありました。輪中会議の役割は、「輪」の横のつながり・広がりを生むことだと思っていましたが、それだけでなく、新しい世代へと縦につないでいく役割も果たしている、ということがわかり、新鮮な思いでした。

輪中会議に何回も参加されている方々には、ややマンネリを感じるところもあるかもしれません。しかし私は今回参加して、年に 1 回、お互いの活動内容や、今おかれた状況・思いについて、情報交換する場があることは、よいことではないかと思いました。皆さんの活動は時が経つにつれて進化したり、世代交代したり、中学生など若い世代をはじめとした人々の成長が見られたりと、様々な変化があり、それを聞くだけで、新しい発見や視点を得られるところがあると思いました。また、新しい分野・新しい地域の参加者の方々や、次の世代の方々が少しずつ入ってきたりして、活動を縦横につないでいくベースとなる場として、この輪中会議が有効に機能しているのではないか、と感じました。

輪中会議 1 回から 10 回ドキュメント
そして 11 回へ新風なり

渡邉　喜代美
NPO ア！安全・快適街づくり　理事

輪中会議の前身、2006 年からのワークショップは、2011 年 3 月で 9 回に及び、地域の水害リスクや行政の防災体制の現状把握、それを踏まえ、水害発生時に備えた自助、共助のあり方、水害に強い市街地の目標像を議論・検討、地域を歩いて観察してきた。GIS を活用した情報共有など、地元の方々や小中学生を交え、世代を超えた学びの場でもあった。楽しく！面白い！学びがある！こと。これが必須。持続性の創出は現在に至っても受け継がれている。

輪中会議のもう一つの前段は、2010 年「安全・快適街づくり勉強会」。町会、NPO、研究者、専門家、葛飾区、東京都、国の各関係者が参集して開かれた。検討課題は広域ゼロメートル市街地における水害対策。その結果は①安全避難高台の確保　②浸水対応型建築物の整備　③近隣継続計画　④輪中会議の設立の 4 点に課題が整理された。この勉強会は全員無償の活動であったことは特記に値する。葛飾区庁舎会議室を借用して、区の職員情野さん＋NPO ア！理事渡邉の 2 人進行役を務めたことも新しい発想である。ゼロメートル市街地協議会の設立は、翌年 2011 年。

2011 年 3 月 11 日！東日本大震災！！想像を絶する衝撃的な災害で、誰しも容易にゼロメートル市街地の安心安全を祈願した。報道される被災地域の共助の絆は、人の命の大切さ、コミュニティーの意義を強烈に再認識させた。そして支援活動。コミュニケーションを旨とし地元の必要を聞いて、それを大事に支援した。南三陸町小中高学生、葛飾区中学生、四国伊座利小中学生による「子供会議」は率直な意見交流で、実にいい関係が生まれた。

大震災から輪中会議の誕生までおおむね 1 年、準備や運営は NPO ア！＋大学＋広域ゼロメートル市街地研究会が担った。

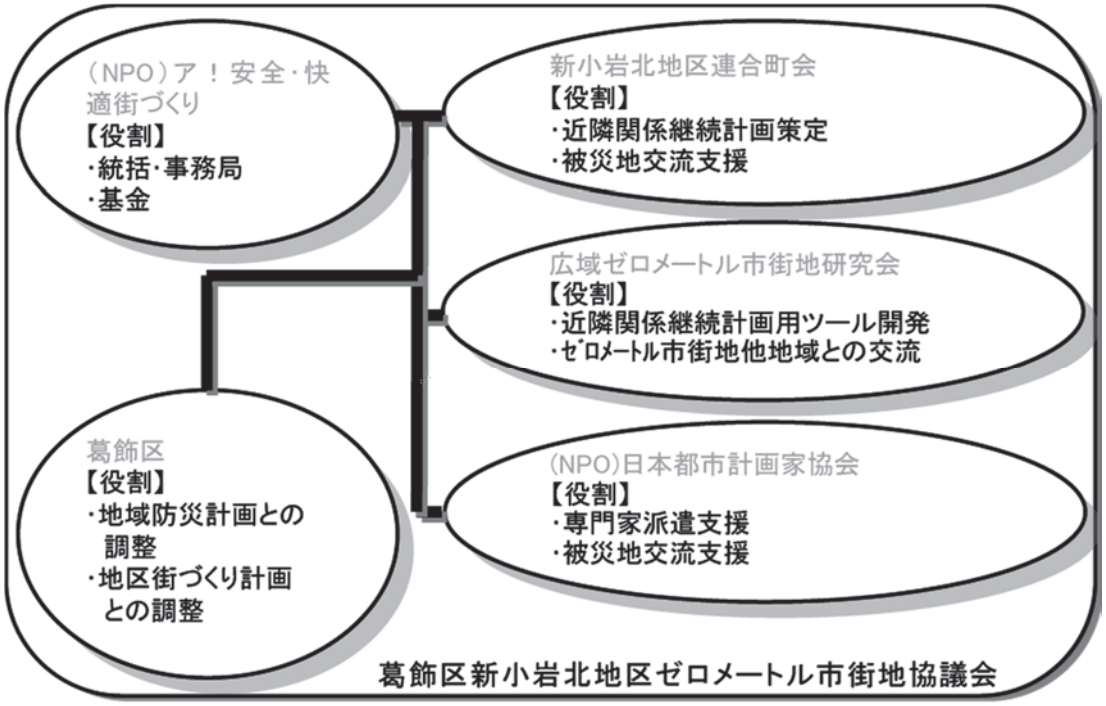
輪中会議第 1 回は 2012 年。東日本大震災！の翌年。ゼロメートル市街地の安心安全快適を希求した活動のまだ初期のこと「地域の方々、研究者、NPO、行政、専門家らが集まって、経験の共有、情報の共有の場があったらいいね」という発案。思いのほか！すー！と立ち上がり、2012 年 9 月第 1 回「輪中会議」となった。3・11 の災害記憶も生々しく、まさにスピード感ある立ち上がりであった。地元人は情報・経験の共有の場「輪中会議」を“プラットホーム”と表現した方もいた。

第1回輪中会議は、2012年9月23日（日）。その趣旨には、「東京東部は地盤沈下により海より低い海抜ゼロメートル地帯、東日本大震災でもみられるように災害時には地域の力が欠かせない。そのためには，できるだけ多くの方に安全・快適まちづくりの輪に加わっていただくことが重要だ。安全・快適まちづくり輪中会議は，地域で活動する様々な方々に対等な立場で参加していただき，皆で問題意識を共有し，これまでの経験から得た知見を分かちあい，学びあい，知恵を出し合い，これからを考えていく」場となった。

こうして輪中会議は、経験の共有、情報の共有の場、そして地元の人、研究者、NPO、行政、企業人も、全員フラットな関係の場としてある。災害と賢く共生するにはフラットな関係が重要。下図はこの時から紙面のランドマークのようになっている。現在のキャッチフレーズは“守る”を“創る”へ展開。
またより積極的に浸水対応型市街地形成を研究すること、災害と賢く共生する親水都市へと展開しようと、その視野を開いた。

輪中会議の推進役は協議会。新小岩北地区連合町会・葛飾区・NPOア！安全・快適街づくり・広域ゼロメートル市街地研究会・NPO日本都市計画家協会で構成された。こうした活動の初期は、「東京都 新しい公共支援事業」の助成を受けてすすめてきた。

知るワークショップ、考え対策を検討する勉強会、協働体制でつくる輪中会議、並行して大学や専門家集団の研究活動、シンポジウムを開いて多様な主体の取り組みを俯瞰する。多様な活動形態で情報、経験の共有をスパイラルアップしていく。さらに並行して、防災アプリの開発「天サイ！まなぶくん」。世代を超えた持続性の創出を支える楽しいツールは人気者になった。さらにGIS活用でゼロメートル市街地を観察した。みな新しい展開やツールにわくわくしつつ、徐々に浸水対応型市街地形成のイメージは共有される方向へむかった。



並行して、町会活動は地上での避難訓練×ボート訓練へ。中学生は部活で自主研究を進め、大学や NPO はそれを支援。部員は全校生徒を前に発表した。生徒たちが部活の発表を静かに拝聴、先生方もびっくり。小学生は素晴らしい授業感想を書いた。活動に参加できない働き盛りの親たちと会話し、親たちにも地域のことを知ってほしい思いでいる。PTA や地元の民生委員の知見は輪中会議で共有され、地元の有志の勉強会やボート訓練も自主展開された。川の視察と称した地元のおやじたちのボート訓練はユニークである。活動は多様で発展的である。また、町会や行政がしっかりサポートしてきたことも高い評価をしたい。そして、NPO ア！安全・快適街づくりや東大加藤孝明研究室などは推進役として、最も欠かせない存在である。

そして 2017 年の 10 回の輪中会議は、2018 年 3 月に 11 回へ進んだ。16 年目の第 11 回輪中会議は、渡邉、土肥から塩崎、色田の進行役へ、リニューアルした。もちろん運営や企画は協働。

地域もにぎやかである。0610 中川でのボート訓練は町会、企業、NPO ア！（しんすい！まなぶ号）新艇＋寄付された手漕ぎ＋各学校手漕ぎボートをいれると、かなりの数である。災害と賢く共生する親水都市は、暮らしの豊かさ“も”希求。新風のモチベーションでさらなる輪中展開をのぞむ。

西新小岩五丁目町会の活動報告

町山　光司
西新小岩五丁目町会　会長

報告の前に今日 3 月 31 日（土）朝刊に 23 区の 3 分の 1 台風高潮で浸水（都想定)。墨田、葛飾、江戸川の 3 区では 9 割以上が浸水。水深は江東区で最大約 10 メートルに達し、浸水被害が 1 週間以上継続する地域もある。台風の中心気圧が、過去に上陸した中で最大規模の室戸台風（昭和 9 年）クラスになると想定。この台風が東京湾周辺を通過する確率は 1,000～5,000 年に 1 回とされるが、都は「最悪の事態を想定した」としており、避難誘導などソフト対策強化につなげていくとしている。

この記事を読んで、特定非営利活動法人ア！安全・快適街づくりに十数年前から研修会等に参加して多くの社会資本をもらいました。当町会は江戸時代と地形的に大部分変化なく先人達からの記録では、中川と共存共栄しながら生活をしていました。大正、昭和初期にかけて、船で日本橋まで物流として経済発展もしました。又親水としても、中川で楽しみがありその当時船宿「三浦屋」、「田中屋」で投網漁を行っていた。川の水は清浄なので水筒の必要はなかったという。当時の旧家は「ゴイムドン」のようにこの様な屋号「○○ドン」で呼ばれていた。正式には田中五右衛門である。他に旧家が 35 軒あって現在も大部分が存在しています。以上の様な地形のまま人口は増加する一方で、家は密集し、危険防災地域に指定されている。

ボート訓練の報告

平成 28 年 4 月モンチッチ防災公園が当町会に開園し、

・日時　同 11 月 6 日（日）9 時 00 分～12 時 00 分
・場所　前半、公園で地震時防災訓練（初期消火・放水・応急救護・避難誘導）
　　後半、大規模災害時訓練（ボート操船・負傷者搬送・救援物資搬送）

以上、西新小岩四丁目町会と西新小岩五丁目町会と合同で東京都地域の底力再生事業として訓練を実施しました。

当日の参加者 300 名増で各班に分散し行動をしました。

・ボート訓練参加者
　　操船者：40 人　傷病人役で乗船：80 人　救援物資輸送：100 人

又協力機関・団体は　葛飾区防災課・本田消防署・本田消防団第五分団・西新小岩都営自治三丁目町会・西三丁目町会・東新小岩五丁目町会・東新小岩七丁目町会・東新小岩八丁目町会の協力で無事終了しました。

防犯の取り組み

次に平成 29 年度は町会地域の治安が悪いため、防犯灯を LED に交換工事新たに 3 か所増設工事を実施した。又平成 30 年 2 月から 3 月にはマイカー5 台をカッターでタイヤを 5 台近隣の自転車 4 台パンク被害届がありました。現在に至るまで当町会では、街頭防犯カメラ 8 機設置を検討しています。この地域のより一層の安全・安心なまちづくりを推進したいと考えております。平成 30 年 3 月 11 日（日）町会会館で防犯カメラ設置説明会を開催しまた。防犯カメラの概要及び設置後の運用の説明後、葛飾警察署 生活安全課防犯係長 奈良警部補からパンク事件の件で、警察署独自で被害者付近の電柱に防犯カメラ 3 台設置したところ犯人逮捕になった様です。又これから火事空き家対策強化に向けて町会の皆様と行動改善に向けて努力したいと思います。

以上経過報告になります。

西新小岩四丁目・五丁目町会合同 地震と水害を想定した総合防災力向上の訓練
（2016 年 11 月 6 日　※平成 28 年度東京都地域の底力再生事業助成 対象事業）

西新小岩五丁目町会　「水害時における共用部の一時的な使用に関する協定」

水害時の一時避難場所のお知らせ

作成　平成２９年１０月１日

会員の皆様には日頃町会活動にご協力頂きありがとうございます。
平成２６年に当町会とシーアイマンション OVEST 新小岩（町会広場斜め前）との間で「水害時における共用部の一時的な使用に関する協定」が為されました。
この度同マンションの要望により具体的な避難エリアの決定、避難者名簿の作成及び担当役員の選定を行いました。
又葛飾区より同マンションに避難時に使用する為の備蓄物資（簡易トイレ及び簡易寝袋 200 人分）の提供がありました。
避難エリアにつきましては同マンションに隣接する**第７地区**とします。避難者は同地区の**当町会会員及び同居する家族**とし、担当役員は**同地区８組の鳥山**となります。
避難収容人数はおよそ２００人で、同マンション内の避難場所は３階以上５階迄の共用部（廊下、階段等但し屋上除く）とします。入口は南側及び北側エントランスとなります。
又屋外ゴミ置き場外壁に水害一時避難施設の表示ステッカーが掲出されています。
外水氾濫（河川の水が台風の影響で町内にあふれて浸水する）で区の避難勧告が発令された場合は、浸水をしない地域へ避難をし、逃げ遅れ等で浸水しない地域へ避難する時間のない場合は、同マンションに避難をして下さい。同マンションに避難後は、担当役員が避難名簿をもとに点呼確認を行います。避難名簿は「西新小岩五丁目町会　個人情報取扱ルール」により管理します。
同マンション使用終了は、区が避難勧告、指示を解除した場合、同マンションに救助が来た場合、同地域の浸水が収束した場合になります。
今回同マンションのご好意により協定を締結しましたので、今後その他災害時には町会との相互協力体制を行うことになりますので、会員の皆様にはご協力をお願いします。

西五丁目町会会長
町山　光司

「自分の身は、自分で守る」ことの大切さ

野﨑　文子
上小松町会　総務部　防火防災部　副部長

私が子供時代を過ごした利根川の下流地域は、大小の河川・池・沼がたくさんあり、川の水が飲料水・風呂の水であり、食器類・衣類を洗う生活用水であり、農業用水でもありました。夏になれば川に池に飛び込み、子ども達の恰好の遊び場となる。各家には何艘ものサッパ舟があり、縦横に張り巡らされたエンマと呼ばれた水路の川面すれすれになるまで稲を積み、米俵を積み、生活用品を積み、行き交っていました。学校と母の教えは「生水は飲むな！」と、今でもしっかり耳の奥に残っています。

洪水も毎年のようにあり、各町村には、「水防団」が組織されていました。洪水は、秋の取入れの時期頃にやってきます。雨が 2〜3 日降り続くと堤防や川の状態を見て回り危険となると半鐘がなり「水が出るぞー」と云う掛け声とともに…。水防団だった叔父は、背中に水防と入った印半纏を羽織って、真夜中でも飛び出して行き、家に残ったもので柱の中ほどに造り付けてある支えに角材を入れて、板を敷き畳や布団を上げ、床になったところで生活していたのを覚えています。現在でも縁の下が高く、上がり框も 50cm 程もあり、台を置かないと上がれないほどの高さがあります。この辺りが早場米地帯（台風が来ない内に早く稲を刈る）になった理由の一つだと叔父から聞いています。昔は「自分の身は自分で守る」という習慣が身に付いていたようです。

数年前、二十数年ぶりに訪ねましたところ、池や沼は田んぼとなり、水路は道路となり、各家の軒先には軽トラックや乗用車が数台あり、サッパ舟の姿はどこにも見当たらず、田んぼの 1 枚 1 枚には太目の水道の蛇口が頭を出している。その変貌ぶりに度肝をぬかしました。そして、かつて籾を干した庭には、工場と見間違うほどの建物が立ち、籾の乾燥機・脱穀機・トラクター等が並んでいた。あの「稲束を干したオダギは」、「サッパ舟は」、「朝露のズボンの裾がびしょびしょになった畦道は」、「水防団組織は今でも残っているのだろうか」、今度行ったら聞いてみよう。

私たちは何をすればいいかを考えなければならない。先ず、町会で開く「防災訓練」に参加して体験学習をして「自分の身は、自分で守る」ということの大切さを学ぶ。小さい単位での「防災・まちづくり」についての勉強会をぜひ開きたい。それによりお隣さん同士の絆を深め、より良いコミュニケーションがとれたら素晴らしいことだと思っています。町会での防災訓練の参加率を上げる手段になるかもしれない。不思議な縁で隣同士になった仲間と「仲よく助け合い、暮らしていきたい」と常日頃痛感している私です。

南極昭和基地で考えた自然環境に対する心構え その②

岡田　雅樹
第 58 次南極地域観測隊　越冬隊長

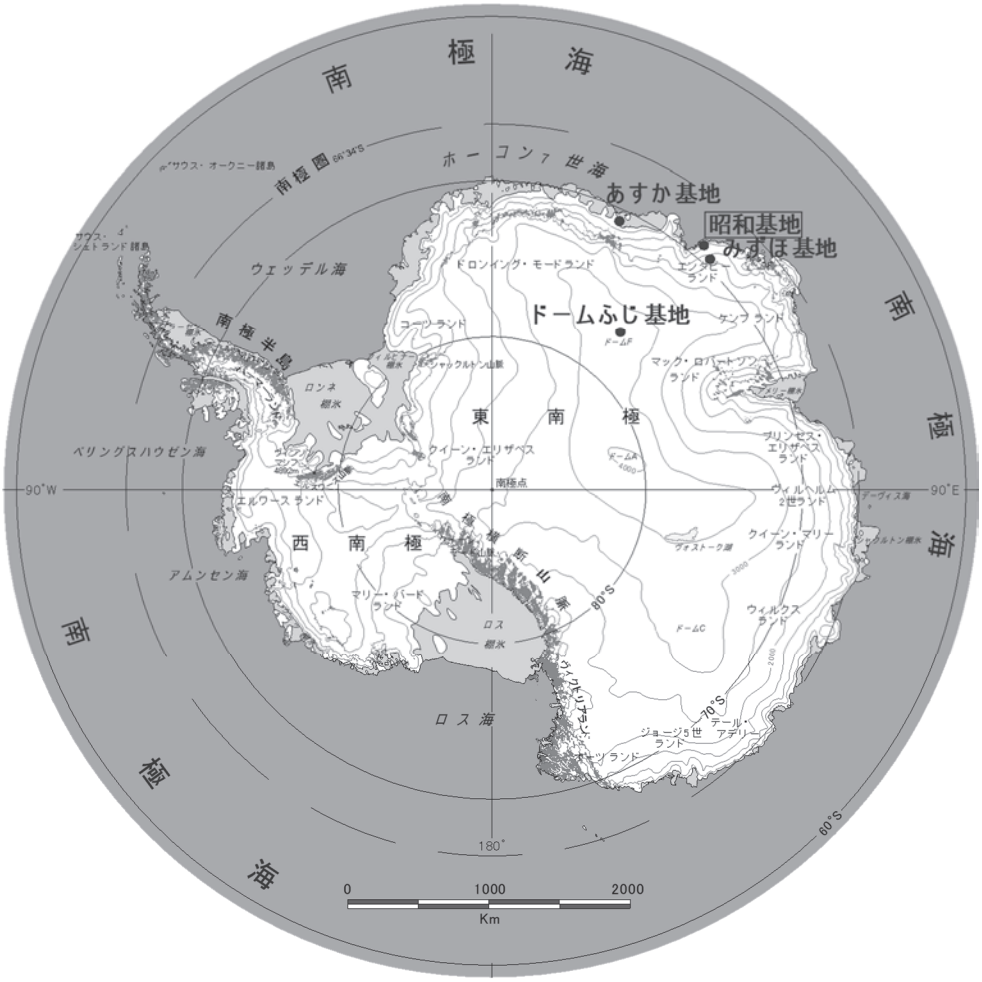
第 58 次南極地域観測隊越冬隊 33 名は今年 3 月 23 日に成田空港に無事帰国いたしました。2016 年 11 月 27 日に日本を出発して以来およそ 1 年 4 か月ぶりの日本ということになります。1 年間の越冬生活を通じて隊員相互の人間関係、信頼関係に多くの変化が起こることは想像に難くありません。越冬隊長という立場から見ても、私自身を含めた隊員間の連携関係が日に日に変化している様子をみることは楽しいことでもあり、また恐ろしいことでもあります。いずれにせよ、隊員全員が無事帰国でき、越冬任務を終了できたことにほっとするとともに、国内からいただいた多くのご支援に感謝する次第です。

一方、昭和基地を取り巻く自然環境は、我々の隊次に限らず千変万化するのが常であり、我々の隊次での自然条件が特別ということはないはずです。58 次の越冬期間中は 10 年に一度といわれる海氷状況が続きましたが、10 年ごとに現れるものだと分かれば次の 10 年への対応は難しくはないはずです。そういう点において、南極観測は 60 年の歴史がありますが、まだまだ十分な経験の蓄積があるとは言えない状況だと実感します。

また、日本とは異なる南極という環境で、観測計画・設営計画を実施するためには、事前の国内での訓練、準備が必要不可欠です。しかし、想定どおりにことが運ばないのは常のことだと頭ではわかっていても、思うように進捗しないことにいら立つ気持ちや、他を責めたくなる気持ちを抑えることは非常に難しいものだということに気づくことは容易ではないようです。

越冬隊員 33 名は、全体で約 100 件の観測計画と約 100 件の設営計画を年間通じて実施します。各計画は専門の担当隊員 1 名が責任者となり計画を実施しますが、人手が不足する場合は他の隊員が支援することになります。支援隊員は必ずしも専門知識を持つわけではなく担当隊員の指示のもとに作業を行います。俗に素人隊員と呼びますが、もちろん全くの素人ではありませんが、専門の知識を持つわけでもありません。1 年間の越冬生活を通じてスキルアップしていくことは本人にとっても隊全体にとっても頼もしくまた楽しいものです。

南極での経験が、日本でどのように生きるかは隊員それぞれですが、越冬隊員には「南極ボケ」という恐ろしい病が待ち受けています。私もこれから日本の生活に再適応しなければなりません。極限環境での経験が少しでも多くの方にお伝えでき、生かすことができればと思います。


南極海
南極海
南極海
南極海
南極圏 66°34'S
ホーコン7世海
あすか基地
昭和基地
みずほ基地
ウェッデル海
ドロンイング・モードランド
ドームふじ基地
ドームF
ヨーロランド
南極半島
ロンネ棚氷
東南極
クイーン・エリザベスランド
ベリングスハウゼン海
90°W
90°E
南極点
エルワースランド
西南極
アムンセン海
マリー・バードランド
ロス棚氷
ロス海
ドームC
ウィルクスランド
プリンセス・エリザベスランド
ウィルヘルム2世ランド
クイーン・マリーランド
ヴォストーク湖
ジョージ5世ランド
テール・アデリーランド
80°S
70°S
60°S
180°
0
1000
2000
Km

平成 30 年度の地域防災ボランティア部の活動報告とこれからの部活

小豆嶋　勇誓
上平井中学校　地域防災ボランティア部　部長

今年度も輪中会議に参加させていただきました。地域の方々をはじめ、葛飾区の職員の方、大学・学校関係の方などの様々な視点を学ばせて頂き、私たち中学生にとってとても貴重な体験となりました。

昨年度の学芸発表会では、地域の方々に伺ったお話をもとに、初めて“防災に関する歴史”というテーマで発表をしました。調べ学習を行ってみると、今起きている災害やこれから起きる災害を今の知識で見ることも大切ですが、昔の災害からも学ぶことがたくさんあることに気が付きました。地域とのチームワークの面では、昔のほうが“自助”が進んでいたのかなと感じました。

今年度以降も、地域の方々とともに、この部活を作っていきたいと考えています。先ほどもあった、“地域のチームワーク”に私たち中学生も、更に加わり、皆様方がお持ちの知識や経験を、中学生なりの立場で考え、語り継いでいく、中学生も地域の一員として、地域を支えていけるような存在になりたいと思います。

昨年度の輪中会議でのアンケートにご参加いただいた方々、ありがとうございました。このアンケートを、これからの発表づくりに生かしてまいりたいと思います。

今後ともよろしくお願いいたします。

お知らせ

今年 4 月より、上平井中 地域防災ボランティア部の顧問の先生が、前任の望月夏美先生から、太田恵理子先生に替わりました。太田先生は英語の先生ですので、防災マップの英語版などが作れると良いかもしれませんね。中国語や韓国語、多言語版もできるといいね。どうぞよろしくお願いいたします。

望月先生は、中央区の晴海中学校に異動されました。これまで大変お世話になりました。晴海も浸水（親水）エリアにありますので、今後もぜひ連携できれば、とお話しされていました。ぜひ輪を広げていきましょう！

（NPO 渡邉より）

ナマズの大予言!?

ちーボラNews

～ちーぼ君と楽しく"防災"を学ぼう～

地域防災ボランティア部
平成二十年二月発行

ナマズと地震の関係！？

地震と電気？

地震は、プレートが動いて、岩石がずれて地面が揺れることをいう。その時、岩石に強い力が加わると、電磁波と呼ばれる、電気が波のように伝わる現象が起こる。→地震が発生すると強い電磁波が放たれる！

ナマズと電磁波

では、ナマズと電磁波には、どのような関係があるのだろうか？

皆さんは、ナマズが電気を発生させられるのは、知っていますか？それと同様に、ナマズは、電気を口ひげで感知することができる！つまり、ナマズが電気を感知し、暴れ始めたら、地震が起こるかもしれないのだ！いつかナマズが防災に活躍できる時まで、ナマズを守っていきたい。

ナマズってどんな生き物？

ナマズは、基本的に夜行性で、昼間は流れがおだやかな河川・沼・湖の底で物陰に隠れて、ひっそりと暮らしている。

口元のひげは、餌を探すのに利用して、ドジョウなどの小魚、甲殻類、昆虫、カエルなどの小動物を食べる。肉食系魚類。

日本の淡水魚の中での食物連鎖では、上位にいる！

一般的な活動水温は一〇℃～三〇℃の範囲とされ、冬は泥の中や岩の間に隠れ、ほとんど動かない。

↓ナマズのイラスト

人間は地震を予知できる？

ナマズが、地震を予知できるかもしれないことはわかった。では、人間は、地震を予知できるのだろうか？

まず、地震の予知とは、どんなことなのか？

地震の予知は、地震が起こる時期、その地震の大きさ、マグニチュード（地震の規模を示す。）を予想すること！

では、この地震の予測を人間は、できるのか…残念ながら、今のところは、予測をすることはできない。

…あれ？じゃあ、あの地震の前に流れる、緊急地震速報はなんなの？

と思った人もいると思う。緊急地震速報は、地震の起こる数秒～数十秒前なのに対して、ナマズは、数週間～数か月前と遠くの予測をしてくれる。人間は、こんなに遠くまでの予測はできないのだ。なぜできないかは、前例のないほどの地震だったり、揺れが急だったりと様々な地震の種類があるからだ。

人がナマズに及ぼす影響とは…？

ナマズは、地震の際に、その電気を感じるが、私たち人間は、様々なことで電気を使っている。ナマズはこの私たちが使っている電気に反応してしまうのか？

ナマズさん、迷惑？

果たして、ナマズは、私たちの使う電気を迷惑だと思っているのか。

浅野氏の実験データによると、『ナマズは、一〇Hz～三〇Hzの電流に敏感に反応する』という。私たちの使う電気の分配量は五〇Hz～六〇Hz（中二理科）なので、安心してください！影響はありませんよ！

ちーボラNewsのキャラクター

ちーぼ君の紹介！

・名前：ちーぼ
・年齢：14歳
・好きなこと：防災について調べること

編集後記

今の人間は、地震の予測はできない。でもナマズを使えば地震を予測して災害の被害を減らすことができるかもしれないと思いました。

参考文献

・ナマズの電気感覚について。
・地中の電磁波を追え！―地震予知に新たな可能性を拓く。
（インターネットから）

全校生徒に防災について学んだことを伝える「ちーボラ News」創刊しました！

地域防災ボランティア部　～学芸発表会に向けての準備 NO. 1～

H30　5月31日　　年　組　氏名（　　）

今後の予定について

6月	大まかな発表内容決定・夏休みどこに行きたいか 夏休みの活動の準備　（新聞づくり）	体育祭（6/2） 定期考査Ⅰ
7月	夏休みの活動の準備（質問等）　見学場所予約 出席調査	終業式（7/20）
8月	夏休みの活動	夏休み （7/21～9/2）
9月	夏休みの活動をまとめる（新聞？） 発表の大まかな原稿構成（PowerPoint） 発表の割り振り・分担	始業式（9/3） 定期考査Ⅱ
10月	原稿仕上げ PowerPoint の完成 発表の練習	学芸発表会 （10/20）

本番！

※多少の変更はあります。　すべて早めに！余裕ある計画にする！

夏休みの活動について

～夏休みの活動　3つの心得～

1、 積極的に話し合いに参加しよう！

自分が不思議に思ったこと、わからなかったことなどはどんどん質問しよう！思いがけない答えがあるかも…！？　ただし！聞き方や態度は注意！！

2、 部活動の一環として…

地域防災ボランティア部では、ほかの部活と違って、様々なところに見学したり、お話を伺ったりすることが多いです。ついはめをはずしてしまいがちですが、あくまでも部活の一環として活動していることを忘れずに活動しよう！

3、 どんどん書きまくる！

お話を伺うときや、見学しているときは、必ずメモを取るようにしよう！何気なくお話しされている内容でも、発表に使えることもあります。集中して、聞き逃さないようにしよう！

こちらは、上平井中地域防災ボランティア部 新部長の小豆嶋くんが自ら作った今年の活動予定表と活動の心得です！顧問の先生が作ったプリントかと思いましたが、自分で作って部員に配布したと聞いてビックリ！したので、許可を取って掲載させてもらいました。

今年もどんどん新しい活動に挑戦していきたいそうです。まさに新小岩・未来の期待の星たち。地域の皆さんから学びたいことも多いと思いますので、ぜひ積極的な活動への参加・協力をよろしくお願いいたします。

（支援担当：東大加藤研 南より）

私と河川・海との繋がり

布施　実
葛飾区立上平井中学校　校長

私は大森で生まれ、大森で育っている。小さいころは駅の近くの神社の階段を登れば、東京湾が見えたもので、平和島海岸では海水浴場もあったことを記憶している。父親は寿司職人で釣りが好きで、ハゼ釣りにはよく連れていってもらった。また、勤務していた学校でも海岸沿いや多摩川沿いの学校が多くあり、海と川に比較的縁のある生活を送ってきた。その中で自然の脅威を感じたこともけっこうあり、特に多摩川沿いの学校に勤務した際、大雨で氾濫した河川、濁流を見て水の勢いや怖さを感じた。

そして上平井中学校に赴任し、町会の中川榮久様中心に、キャサリン台風のことや大曲がりがたくさんある中川が氾濫した時の予想など、この地でなければ感じることができなかったことを多く学んでいる。数年前、多摩川の濁流を見た時恐ろしさを感じたが、それでもその多摩川の下流は曲がりくねったものでなく、「もし中川だったなら？」と今更ながら意識を高めていかなければならない重要性を感じている。さらに本校の地域防災ボランティア部の生徒の取組からも多くの知識を得ることができた。生徒とともにこの地のことを学んでいき、意識を高めるというのはこの地でなければできないことであると感謝するとともに、さらに防災意識を高める必要性を感じている。

昨年の 6 月に東新小岩七丁目・八丁目のゴムボート訓練に参加する機会があった。その体験記を紹介する。

6 月 3 日（土）、東新小岩七丁目町会と八丁目町会で所有しているモーター付きゴムボートで、訓練と河川などの調査に行ってきました。北地区委員会の竹本利昭様をリーダーに総勢 8 人で午前 9 時須磨公園付近を出港しました。コースは中川→荒川→東雲運河→東京湾→レインボーブリッジ（橋脚の下を通過、大迫力でした）→第 3 台場→隅田川→日本橋川→神田川→御茶ノ水分水路→隅田川→荒川→中川で戻ってくるというかなり長時間のルートでした。途中トイレ休憩のため停泊するだけで全行程 8 時間ほどの調査行でした。東京湾は当然のこと、中川・隅田川は川幅が狭い分波が大変高くボートはかなり揺れました。隅田川は観光船なども多く、川面は大きく波打っていました。神田川は別名暴れ川といわれるそうで、氾濫に備えて数キロの分水路があり、真っ暗な分水路をボートは進んでいきました。ボートから陸地を見ると御茶ノ水付近と新小岩とでは全く水面の高さが違うこともよくわかりました。東京、その中でも葛飾区は川も多く、都心とは言え自然に恵まれているとも言えますが、もしもこの川が氾濫したらと考えた時、日頃から防災意識を高めていく必要性を身に染みて感じました。地域防災ボランティア部は昨年このあたりのことをよく研究していましたが、学校と地域がさらに協力しあい、万が一の時の対応を考えていく必要性を強く感じました。東新小岩七丁目町会、八丁目町会の皆様ありがとうございました。

地域の方々から学ぶ

渋谷　英一
葛飾区小中一貫教育校　新小岩学園　松上小学校　校長

葛飾区小中一貫教育校新小岩学園松上小学校に赴任して、5年目に入りました。毎年、輪中会議に参加させていただいています。今回は、本校の卒業生が上平井中学校の地域防災ボランティア部員として参加し、発表していたことがとても嬉しかったです。小学生から、防災への意識を高めていくことの大切さを改めて感じました。

今回の会議では、広域避難について学ばせていただきました。大型台風による水害が予想される時に、数日前に、遠方に避難するという考え方です。この避難ですと、学校も、予め休校とすることになります。本校では、水害に備えて、屋上への避難訓練を年 1 回実施しておりましたが、現実的でないことを学ばせていただきました。高所に避難しても、数日間は水がひかず、学校にそのまま残ることになり、食料の確保などたいへんな困難に直面することになります。水害は、地震と異なり、予想ができますので、広域避難という考え方が効果的です。学校の避難訓練をより現実的な訓練に改めていかなければなりません。

また、加藤先生の「川の恵みと脅威をバランスさせた水害リスクと賢く共生する新しい文化を創出することが今後の方向性である。」という考え方にも、心を動かされました。マイナス面ばかりを考えていましたが、水辺に生きるプラス面にも注目していくべきであることを学ばせていただきました。

輪中会議にかかわる学校の取組としては、寺島玄様による 6 年生向けの講演会、また、3年生対象の地域の学習を継続しています。寺島様の新小岩地域の歴史のお話では、この地域の方々は、水害に悩まされながらも、たくましく生き抜いてきたことが語られました。3年生の学習でも、子供たちの防災意識を高めることができました。

松上小学校の課題として、避難所運営会議が開催できていないことがありましたが、昨年度、ようやく開催することができ、9月 17 日（日）に避難所運営訓練も実施することができました。これも、毎年、輪中会議に参加させていただき、地域の皆様の熱心な取組に刺激を受け、本校でも、取り組まなければならない、という気持ちにさせていただいたことが大きなきっかけになりました。今年度も、9月 9 日（日）に、避難所運営訓練を予定しています。

これからも輪中会議で学ばせていただいたことを土台にして、本校としての、自然災害への取り組みを充実させていかなくては、と考えております。

東新小岩七丁目オリジナル！
水害時の避難の解説パンフレットができました！

NPO ア！安全・快適まちづくり

東新小岩七丁目町会では、大規模水害対応の先進モデル地区として、2016 年度から NPO ア！安全・快適まちづくりや葛飾区、内閣府、東大加藤研などと連携し、大規模水害からの避難について話しあうワークショップを行ってきました。また、ワークショップに関連して、七丁目の住民の方々に水害時の避難先や避難方法などを聞くアンケート・インタビュー調査を実施しました。七丁目では、中川町会長はじめ、地域の方々の日頃のご努力もあり、住民の方の水害意識が高いことに改めて驚かされました。

しかし、課題も浮き彫りになりました。インタビュー調査に協力して下さった住民の方からは、「マンションの管理費と一緒に町会費は払っているが、活動に参加する機会が少なく、十分な情報が得られない」といった声も聞かれました。また、そもそも調査に協力してくださるような方は元から意識が高い方が多く、実際は調査に参加されていない方にこそ、正しい水害リスクを伝えるべきなのではないか、と議論が進みました。

そこで、2017 年度には葛飾区や内閣府の協力の下、NPO や大学とも議論しながら、**東新小岩七丁目町会オリジナルの「水害避難解説パンフレット」**を作成しました。これまでも区が作るパンフレット等はありましたが、今回のパンフレットには東新小岩七丁目の地域に特化した、具体的な浸水想定や避難経路が詳しく解説されており、これまで関心が高くなかった方にも、より“**自分ごと**”としてとらえていただけるように工夫しました。また、町会のボートや救援表示旗などの取り組みについても写真や絵を使って説明し、これまで町会活動にあまり参加していなかった方にも興味をもっていただくことを狙っています。

もちろん、最適な避難の方法は、地域や災害状況より異なります。今回のパンフレットが完成したことで満足せず、むしろ出発点として、これからも活発に、創造性の高い議論が行われることを期待しています。議論が進むたびにパンフレットの内容を更新し、第 2 版、第 3 版…と発展させることができれば素晴らしいですね。そして、今回の七丁目を発信源に、他の地域にもこうした活動や議論の輪が広がっていくきっかけになればと思っています。

※ なお今回のニューズレターには、本件に関連する報告が、東新小岩七丁目町会長の中川さん、内閣府の磯部さん・宮下さん、東大加藤研の南からそれぞれ寄せられていますので、あわせてご覧ください。

文責：南　貴久

水害避難について話し合う東新小岩七丁目町会の皆さん

輪中会議でこのパンフレットについて説明する
葛飾区役所の大田さん

※本パンフレットは、葛飾区や内閣府等のご協力の下、東新小岩七丁目町会において作成したものです。
東新小岩七丁目町会、葛飾区 地域振興部 防災課、ア!安全・快適街づくり、東京大学 生産技術研究所 加藤研究室、内閣府（防災担当）、国土交通省 荒川下流河川事務所、気象庁東京管区気象台、東京都 総務局 総合防災部

東新小岩七丁目の皆さん
あなただったら、どうする？

大規模水害から命を守ろう！

このまま地球温暖化が進むと、台風が大型化し、勢力がさらに強くなる可能性があります。

大型の台風の影響により、荒川・江戸川の洪水や東京湾の高潮など葛飾区でも大規模な水害が起こってしまう可能性があります。

普段、身近な河川は市民の憩いの場

河川敷で野球などのスポーツや季節の風景を楽しめます。日々の生活をより豊かにしてくれる場所です。
（荒川河川敷での凧揚げの様子。葛飾区より提供。）

しかし、

大規模水害で、深刻な被害が発生する可能性があります

葛飾区は、大きな河川に囲まれたゼロメートル地帯に位置しています。洪水や高潮などによって、広い範囲が深刻な浸水被害を受ける可能性があり、江東５区には250万人もの人が暮らしているため、避難にも時間がかかることが予想されています。

1947年 カスリーン台風による葛飾区の浸水の様子
国土交通省　関東地方整備局
利根川上流河川事務所
「写真でみるカスリーン台風」より

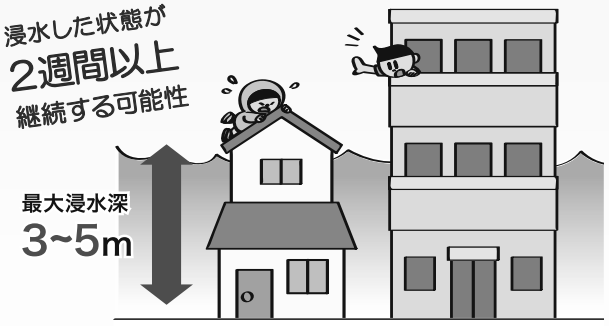
東新小岩七丁目のリスク

浸水の深さ・期間

2階まで浸水、浸水継続時間は**2週間以上**（想定）

救助までにかかる時間

数週間（想定）



みんなで犠牲者ゼロを実現するための避難の方法を考えよう！

葛飾区では、スーパー台風の接近等により、
荒川が氾濫する可能性がある1日前に「広域避

※広域避難勧告：江東5区長が、江東5区全住民に対して、浸水区域外への避難の

大規模水害時に 自宅に留まって しまうと…

2階に避難しても
浸水の可能性があるため、
とても危険です。

2週間以上、電気・ガス・トイレ等が
使えなくなる可能性があります。

※マンションや
3階以上の住宅に
お住まいの方も！

要配慮者がいる場合

※要配慮者：歩行が困難で、公共交通機関を利用しての避難もできない方。

下記のような状況が2週間以上続いてしまう可能性があります。

- □ 急病の場合、医師に診てもらえない
- □ 現在、療養中の方は、薬が届かない・透析ができない
- □ 医療機器が使用できなくなる等、命の危険にさらされる

3階以上に避難して 取り残されると

衛生環境が悪く、物資が届かない中、2週間以上も孤立生活を送らなければいけなくなる可能性があります。

広域避難勧告が発表されたら、すぐに江東5区外

スーパー台風の接近等により、荒川が氾濫する可能性がある場合、東京都西部等に避難所等

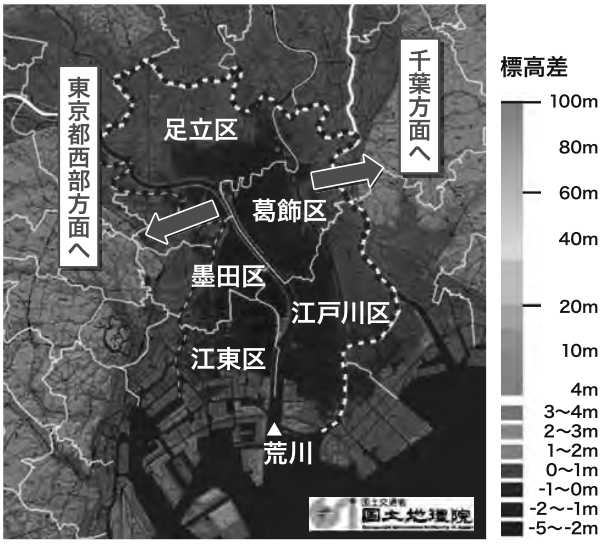
江東5区外の親戚・友人宅等の自主避難先の確保を

地震とは違い水害はある程度、事前に予測ができるため、
早めに避難をすれば命は助かります！

避難勧告」を発令することを検討しています。

のための立退きを勧告すること。　※江東5区：葛飾区、墨田区、江東区、足立区、江戸川区

安全に 江東5区外 に避難するには…



スーパー台風の接近等により、荒川が氾濫する可能性がある

3日前

葛飾区から**広域避難勧告の発令の可能性についてお知らせ**がある場合、**自主避難や避難のための準備を始めてください。**

1日前

葛飾区から**広域避難勧告が発令された場合、すぐに避難を開始してください。**

東新小岩七丁目からの避難の方法

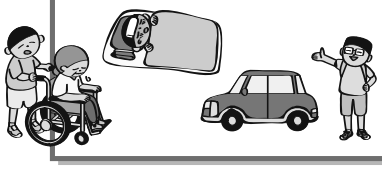
自動車での避難は交通渋滞が予想されます。そのため原則として、歩行が困難な方以外は公共交通機関や徒歩で避難してください。

電車での避難　**新小岩駅** からJRを利用して避難してください。

※雨風が強まる前に利用する交通機関の最新の情報を取得し、早めに避難を開始してください。
※**地下鉄は水害の起きる12時間ほど前**・**電車は水害の起きる6時間ほど前**には**止まってしまう**可能性があります。

徒歩・自転車での避難　**千葉方面への避難は江戸川に架かる橋が少ないため、大渋滞になる**可能性があります。**できるだけ東京都西部方面に避難してください。**

自動車での避難　**1日前**　**広域避難勧告**の発令があった場合：**要配慮者のみ**車で避難可能。
1日前以上前に　**避難する（自主避難）**場合：**誰でも**車で避難可能。



※要配慮者：歩行が困難で、公共交通機関を利用しての避難もできない方。
※要配慮者の方のうち、自動車の当てがない方：二上小学校に避難してください。

の安全な場所へ避難を開始してください。

等が開設されますが、**すべての避難者が避難することはできない**可能性があります。

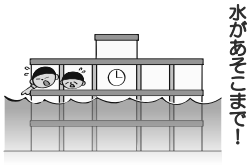
をお願いいたします。

東新小岩七丁目町会で行った聞き取り調査では、
江東5区外へ避難すると回答した40世帯のうち、31世帯(約78%)の方が親戚・ホテル等の自主避難先に避難すると回答されました。

どんな備えが必要？

二上小学校の3階以上には
住民の400人しか
避難できません

いざ、
二上小学校に
避難しても
思わぬコトが
起こるかも…



江東5区外へ避難が可能な方

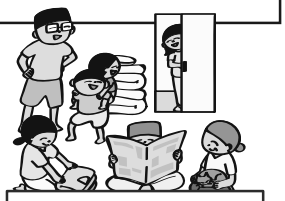
- ☐ 江東5区外の親戚、友人、知人宅に避難させてもらえないか検討する
  - ☐ もし避難できる江東5区外の親戚、友人、知人宅のあてがあれば、事前にお願いをしておく
  - ☐ 避難先のあてがない場合は、区が指定する江東5区外の避難先への避難を検討する
- ☐ 避難時に持っていく荷物をまとめておく
- ☐ 常備薬やお薬手帳を持ち出す準備をしておく
- ☐ 被災時の家族との連絡方法を考えておく

歩行が困難で公共交通機関を利用しての江東5区外への避難もできない方

- ☐ 二上小学校への避難方法を考えておく
- ☐ 避難時に常備薬や食料も持参する
- ☐ 町会などに二上小学校へ避難する旨を伝えておく

※二上小学校に避難した場合も、
電気・ガス・水道・トイレ等が使えません。

江東5区外の指定避難所



江東5区外の親戚宅

情報収集

パソコンや携帯がない場合は、かつしかFM（78.9MHz）を聞いてね！

テレビやパソコン・携帯から上流部の水位や雨量、高潮の時間帯や高さの予測が確認できます

テレビ

1. チャンネルを**NHK総合テレビ**にあわせ、テレビの「**d**」ボタンを押してください。
2. トップメニューの「**地域の防災・生活情報**」から「**河川水位情報**」を選択すると、水位の状況が表示されます。
3. トップメニューの「**気象情報**」のページでは、自宅付近や関東周辺の雨量を知ることができます。「**気象情報**」を選択したあとに「**メニュー**」を選択し、「**各地の降水量と風**」を表示させると、全国各地の雨量や平均風速等の情報もチェックできます。

上流部の水位や雨量等をチェック！

パソコン・携帯・スマホ

1. 「**川の防災情報**」を入力し検索して、下記のページを開いてください。
   http://www.river.go.jp/kawabou/ipTopGaikyo.do
2. 上の「**水位雨量**」のボタンを押し、右側の地方・都道府県から「埼玉県」等の見たい都道府県名を選択すると、水位や雨量等の状況をチェックできます。

※ 高潮の時間帯や高さの予測は、気象庁ホームページの防災情報から気象警報・注意報を選択し、チェックしてください。

どうしても逃げ遅れた場合、町会が保有しているボートや救援標示旗を活用し、救助を行います。

救援標示旗
赤旗を掲げているお宅と
旗が揚がっていない家に声をかける

要救援の
サイン

救援不要の
サイン

問い合わせ先

（パンフレット全体に関すること）
葛飾区地域振興部防災課計画係 TEL 03-5654-8572

（アンケート・聞き取り調査結果に関すること）
内閣府（防災担当）TEL 03-3501-5693

水害図上訓練を実施しました

大田　聖家
葛飾区　危機管理課　災害対策係

葛飾区では、区として初めて水害を想定した図上訓練を実施しました。私は水害担当として、訓練の企画とシナリオの作成等に取り組みました。

【訓練目的】

本訓練は、区でこれまで整理してきたことを確認し、荒川の水位が上昇していることを想定した訓練シナリオを読み上げることで、気象状況や荒川の水位上昇に伴う情報連絡態勢、水防本部、災害対策本部の各態勢の際に取り組むべきことを確認するために実施しました。

主に以下の 4 項目の実現を目的としました。

① 荒川下流タイムラインにおける葛飾区の防災行動の基本的な流れを確認する。
② 区を流れる河川の浸水リスクや避難計画の基本的な考え方について確認する。
③ 平成 29 年台風 21 号の際の葛飾区の対応と教訓を確認する。
④ 豪雨災害で被災した自治体の対応と教訓を確認し、水防要員・災害対策本部要員としてするべき行動の基本的な流れを確認する。

【日時】　平成 30 年 3 月 17 日（土）　8:00～12:00
【実施場所】　区役所 5 階庁議室
【参加者】　43 人（防災課 20 人、都市整備部 23 人）

訓練は、訓練シナリオを参加者で読み上げながら、荒川洪水時の対応をシミュレーションしました。シナリオの途中には 8 つの「状況判断」があり、若手職員を指名して、その状況下でどう判断し、対応するかを考えて発言しました。オブザーバーとして参加していただいた荒川下流河川事務所からは、「今回は荒川の水位を見た訓練でしたが、河川水位は中小河川（中川）の水位変動が著しい所もあるのでその点も注意の必要があると思います。」とのコメントもいただきました。今後も継続して、水害図上訓練を実施したいと思います。

川の手・人情都市「かつしか」の実現に向けて

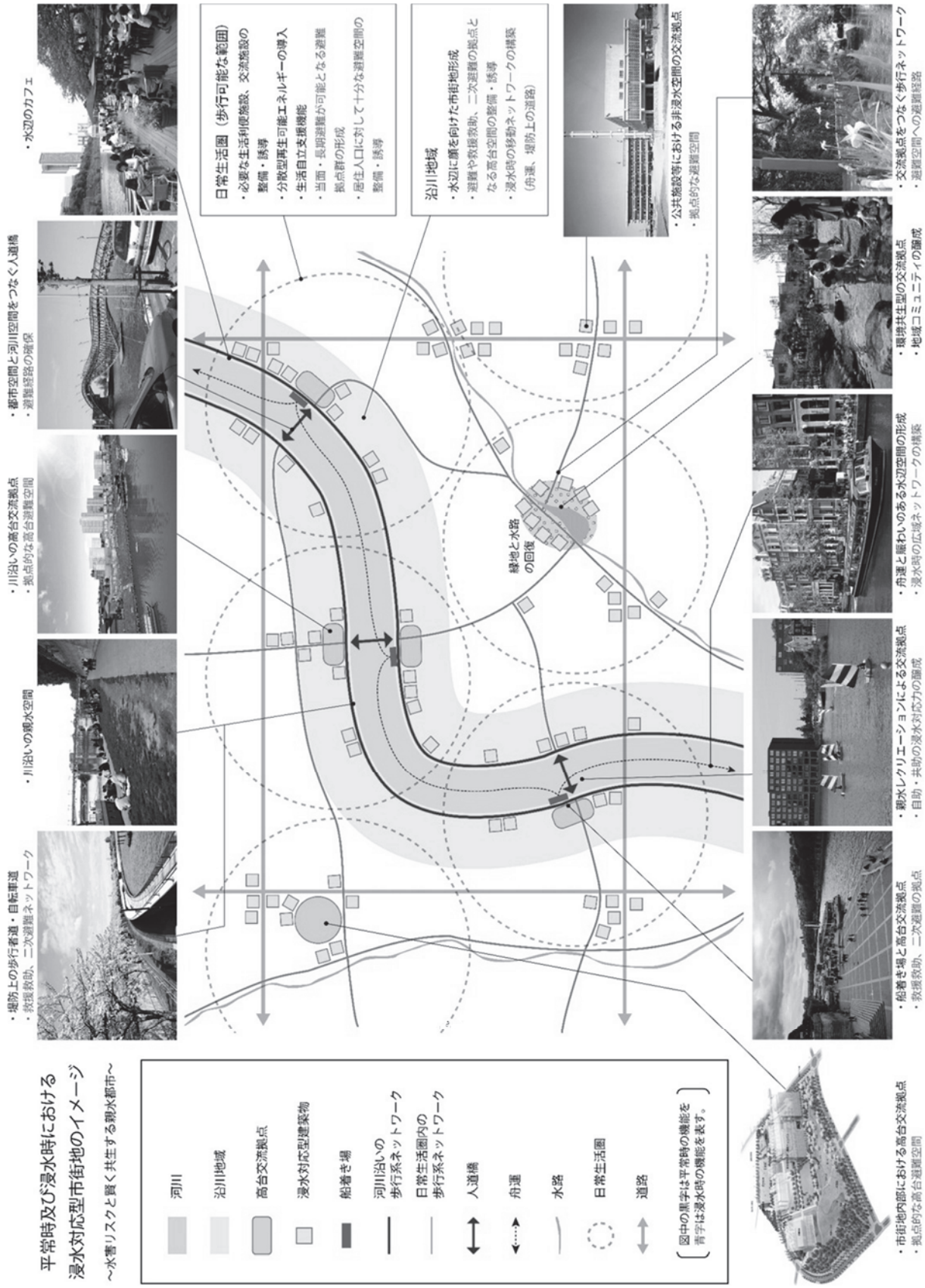
情野　正彦
葛飾区　都市施設担当部長

都市計画マスタープランの改定から 7 年が経過しました。改定では、ア！安全・快適街づくりや広域ゼロメートル市街地研究会などからの提言を受け、治水安全度の向上や、河川を身近に親しむことができる環境の形成などの取り組みを強化したもので、輪中会議などによる新小岩北地区を中心とした取り組みや中川テラス、緩傾斜堤防の整備などが進展するとともに、水害時の救助救出の拠点となる新小岩公園の高台化の取り組みも動き出しています。

完成した奥戸スポーツセンター公園沿いの緩傾斜堤防

また、昨年から、輪中会議のエリアとなる中川、新中川などで囲まれた新小岩・西新小岩・東新小岩・奥戸地域を対象として、浸水に対応したまちづくりの検討を進めています。現在、本区では、大規模な水害が発生した場合、広域避難を原則としていますが、荒川や中川の沿川では川と一体となったまちづくりを、市街地側においても避難生活の長期化にも対応した空間を創出し、将来的には逃げなくても大丈夫なまちの実現を目指すものです。

引き続き、皆さんと連携し、2 つのしんすい（浸水と親水）をキーワードとして、本区の貴重な資源である川を生かしたまちづくりを進めていきます。



平常時及び浸水時における浸水対応型市街地のイメージ

洪水・高潮氾濫からの大規模・広域避難について

内閣府政策統括官（防災担当）付
参事官（調査・企画担当）付
参事官補佐　磯部　良太
主査　宮下　妙香

1. はじめに

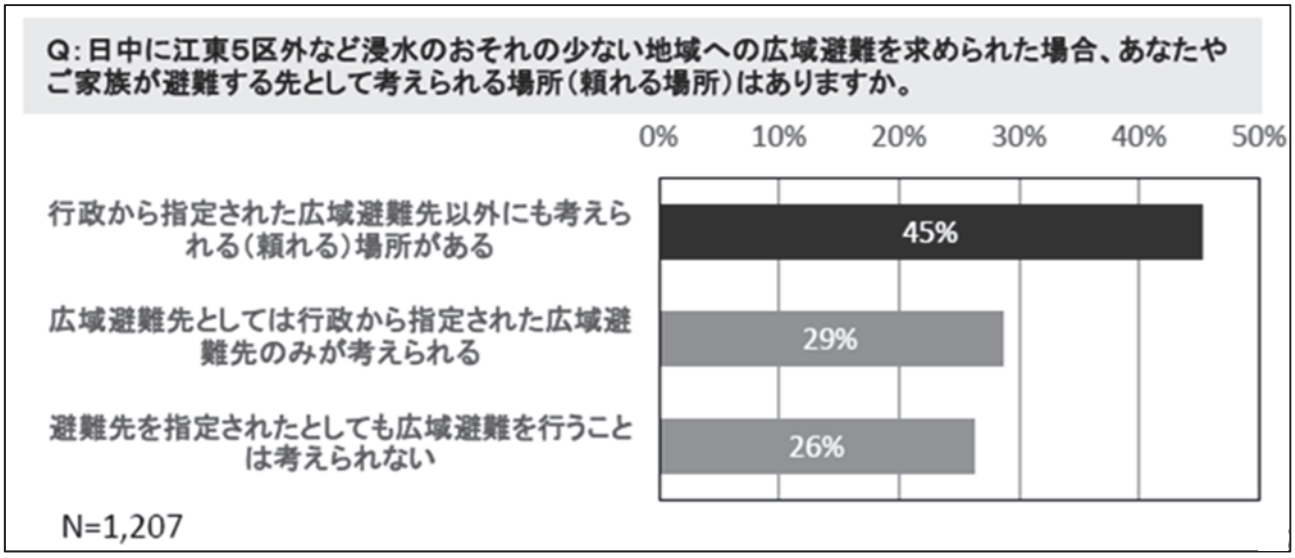
近年、気候変動の影響等により大規模水害の発生が懸念されています。都市圏等における洪水や高潮氾濫からの大規模かつ広域的な避難の在り方等を検討するため、中央防災会議の下に「洪水・高潮氾濫からの大規模・広域避難検討ワーキンググループ」が設置され、平成 30 年 3 月に「洪水・高潮氾濫からの大規模・広域避難に関する基本的な考え方（報告）」がとりまとめられました。本報告では、大規模・広域避難の具体的な検討手順について定量的な算出方法が示されるとともに、海抜ゼロメートル地帯が広がる江東 5 区（葛飾区、足立区、江戸川区、江東区、墨田区）を事例として具体に検討した結果が併せて整理されました。

2. 洪水・高潮氾濫からの大規模・広域避難に関する基本的な考え方（報告）

大規模・広域避難の具体的な検討手順の概要を以下に示します。

- 基本となる対象災害と対象地域の設定（手順 1）
- 浸水区域外への立退き避難･浸水区域内での立退き避難及び屋内安全確保のバランス（手順 2）
- 移動困難者の避難先の確保（手順 3）
- 決壊後における浸水区域内からの救助可能性の検証（手順 4）
- 大規模・広域避難に要する時間の算出（手順 5）
- 広域避難勧告等の判断基準の設定（手順 6）
- 大規模・広域避難の避難先の確保（手順 7）

上記手順について、江東 5 区を事例として具体に検討を進める際に、住民へのアンケートやインターネット調査等を活用しました。例えば、手順 7 において、インターネット調査を用い、浸水区域外に自主避難先を有する住民の割合を推計しました（次ページ図）。



20 歳以上の江東 5 区居住者を対象としたインターネット調査
（浸水区域外への避難（避難先））

3. 終わりに

内閣府では、東京都とともに関係機関からなる検討の場を設置し、大規模・広域避難の社会実装に向けた検討を行うこととしています。引き続き葛飾区をはじめとした地域の皆様のご協力が必要となりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

平成 29 年度上期葛飾区地域活動団体助成費事業報告

増澤　一朗
NPO ア！安全・快適街づくり　事務局

1. 始めに

葛飾区が毎年度上・下期に募集している、地域活動団体への助成金事業へ応募し、幸いその都度交付を得ている「親子が語り合い、親から子に語り継ぐ大水害時の避難について」事業を報告する。

当 NPO は以前から地元松上小学校の一クラスを対象に出張授業や、地域自治町会とのワークショップに上平井中学校理科部員を誘ったりして、大水害時の避難について啓発活動を続けていた。

しかし、東日本大震災を機に、地元の保育園、小学校、中学校へも活動の輪を広げ、「『てんでんこ』で命だけは助かろう。」を合言葉に、新小岩北地区が工場の地下水汲み上げで満潮時、海水面下に沈むゼロメートル地帯となっていることを伝え、万が一大雨や大地震で中川堤防が決壊した際でも「釜石の奇跡」がこの地でも根付くよう願って「出前授業や講演会等」を行っている。

2. 出前授業や上平井中学校地域防災ボランティア部への支援等

「釜石の奇跡」は釜石市の小中学生ほぼ全員が、『人を助けるより先ず自分が助かるよう行動する。』教育を受けていた結果、東日本大震災では津波に襲われずに済んだ事実をもとに当 NPO は、平成 29 年度も次のような活動を行った。

殊に、昨年の総会で参加者の方から、「私共地域の『上小松小学校』でも出前授業を開催して欲しい。」旨の要望があり、今年 1 月関係者の御尽力で実現した。

先ず、上平井中学校地域防災ボランティア部員と町会役員参加による東京大学と工事現場見学、そして船から見る街めぐり或いは、親水河川のある新小岩街歩き等の成果を 10 月 21 日（土）に、同校体育館で行われた「学芸発表会」で披露し、聴衆を魅了した。

10 月 28 日（土）には、うらら保育園で、中村芝浦工大教授による「大水害時の避難について」の講演とパネル展示を行い、講演会で若い保護者は「始めて見聞きすることばかりで大変ためになった。」お年寄りの参加者は「避難の大切さを思い起こさせて貰う、有益な内容だった。」との評価を頂き、又、会場に近年世界で起きた大水害や葛飾区の水害史に加え、東日本大震災等のパネルを展示し、参加者の関心を呼んだ。

11 月 11 日（土）（葛飾教育の日）から始まった一連の出前授業は、今年の 3 月 10 日（土）まで合わせて 8 回行ったが、講師陣は中川町会長さんや地元自治町会役員の方に加え、大学関係者や学識経験者が教壇に立ち、小学 3 年から 6

年生の授業を受け持った。

各講師は対話形式で生徒に問い掛け、反応を確かめながら進め、生徒は関心と興味を持ちながら自然と引き込まれて行く間に、忽ち終業のベルが鳴ってしまうという理想的授業の繰り返しだった。

中川町会長さんは、70 年前のカスリーン台風での過酷な体験を又、奈良木上小松小学校評議員は日頃の町会による避難訓練を、更に竹本防火防災部長さんは昔からの言い伝え、「地震・雷・火事・・・」について語った。

一方、東大の塩崎さん、南さん、金さんは、郷土かるたの川札で川への関心を集めると共に、スクリーンへ生徒の家が刻々と浸水する様子を動画で映し、教室が大いに盛り上がった。

更に、寺島さん（NPO あらかわ学会）による特別授業「新小岩の水害と街の今昔」では、新小岩の姿を熱っぽく語る講師に生徒全員が引き込まれ、「わが街に愛着と誇りを持てるようになった。」と多くの感想が生徒から寄せられた。

3. 親から子に語り伝える大水害時の避難について

本事業の柱である、「もし、荒川（中川）の堤防を越えて浸水したら・・・大雨や大地震で堤防を越えたり決壊したりして浸水したとき、あなたはどこに、どのようにして避難しますか？思いうかべてみましょう。」は、シミュレーション用紙を渡し、各家庭で親子共々安否確認とその連絡手段及び避難先や避難生活等について話し合い、書きとめ、確認し合う作業である。

この作業は普段会話の少ない親子が、予め大水害や大地震が来ると想定してその時、親は自分は、兄弟は・・・と思いを巡らし想像し、家族全員が安心して避難生活が送れるよう、最悪でも自分の命だけは助かるために取るべき行動等を話し合うことを目的としている。

昨年度も上平井小学校第 4 学年と第 6 学年、二上小学校第 5 学年、松上小学校第 5 学年を対象に行い、生徒から「親が何処に勤めているのか、何をしているのか、安否確認の方法は、連絡先は・・・等々知らな過ぎたので話し合って良かった、家族で災害に備える準備をしたい。」との感想が多く寄せられ、継続して行うシミュレーションの必要性を強く感じている。

4. 終わりに

当 NPO は東日本大震災から既に 7 年が経ち次第に記憶が薄れても、ゼロメートル地帯に生活する生徒とその家族が大水害時・大地震時に自分の命が助かり、人の命を助け、家族全員が安心して避難生活を送れるようにと願って活動している。これまでも葛飾区の助成を頂きながら新小岩北地域に定着しつつある本事業は、これからも保育園・各小学校・中学校、連合町会等を通じ地道に息長く活動する必要がある。

西新小岩三丁目町会勉強会報告

船山　吉久
水害時避難用高台整備勉強会　事務局

西新小岩三丁目町会と NPO 法人「ア！安全・快適街づくり」は、これまで 14 年以上にわたり、東部低地帯の地震時水害を軽減するために、行政機関のほか大学や近隣町会などと協働して活動を行ってきました。その結果、浸水に備えた水位標の設置、ゴムボートの普及活動、新小岩公園高台化の葛飾区都市計画マスタープランへの位置づけなど、一定の成果を挙げてきました。

この間、平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災を教訓に、西新小岩三丁目町会の有志住民と当 NPO は、大地震時のもしもの水害に備えるため、平成 25 年 8 月に東京都都市づくり公社から「水害時避難用高台整備勉強会」としてまちづくり支援事業の認定を受け、『命だけは助かる新小岩公園の高台化等』を目指し勉強会を立ち上げました。その後、勉強会は、高台化のほか避難経路の整備や避難所の拡充など、地域に根ざした水害軽減策を検討し、その実現に向け活動を行ってきました。

勉強会は、基本的に毎月 1 回第一土曜日に行い、25 年 10 月より 30 年 3 月まで計 38 回実施しました。

それぞれの勉強会の概要は次のとおりです。

（なお、第 1 から 32 回勉強会については、平成 29 年ニューズレターに同様の概要が掲載されています。）

○ 第 1 回勉強会（H25.10.5）
これまでのスーパー堤防事業化活動の総括と今後の勉強会のテーマについて

○ 第 2 回勉強会（H25.11.2）
葛飾区の地震火災時及び水害時の避難場所の現状と課題について

○ 第 3 回勉強会（H25.12.7）
葛飾区職員による葛飾区の過去の大洪水と水防計画について講義

○ 第 4 回勉強会（H26.1.11）
荒川下流河川事務所長による東日本大震災の教訓とより安全な避難方法やスーパー堤防整備計画の現状について（河川防災ステーションの紹介）

○ 第 5 回勉強会（H26.3.1）
葛飾区の西新小岩避難場所計画の問題点と小･中学校を避難場所とする要望の検討

○ 第 6 回勉強会（H26.4.5）
東新小岩七丁目町会長による同町会の先進的な共助体制と防災活動についての講義

○ 第 7 回勉強会（H26.5.17）

勉強会が土木学会市民普請支援事業に採択されたことの報告とその助成金を活用した紅白旗配布による共助体制造りの提案と、河川防災ステーションのスキームの説明

○ 第 8 回勉強会（H26.6.7）
土木学会市民普請支援事業の助成を活用した赤旗白旗の作成と配布方法についての提案と、河川防災ステーション整備に伴うコミュニティー施設や避難施設の要望について

○ 第 9 回勉強会（H26.10.4）
地域の共助体制を強化する赤旗白旗事業の進め方と地震水害時の避難方法及び河川防災ステーションについての勉強

○ 第 10 回勉強会（H26.11.8）
「第 7 回輪中会議（H26.10.19）」の報告と「東部低地帯の地盤と中川左岸堤防について」の勉強

○ 第 11 回勉強会（H26.12.6）
「浦安液状化被害状況」と「西新小岩一・二丁目の中川沿川都有地に予定されている緩傾斜型堤防整備事業の西新小岩三丁目住民生活への影響について」の勉強と「東京都都市づくり公社への勉強会中間報告の提出について」の説明

○ 第 12 回勉強会（H27.1.17）
「河川防災ステーションの制度と避難広場計画の課題について」の勉強と「勉強会中間報告の葛飾区都市施設担当部長への説明」の報告

○ 第 13 回勉強会（H27.2.7）
「西井堀を埋め立て緑道整備を区が実施した経緯」の説明と、「河川防災ステーション避難広場に望まれる施設、災害時避難の新たな考え方、西新小岩避難場所や避難路等の可能性、新小岩地域浸水被害軽減策を考える」をテーマにした勉強

○ 第 14 回勉強会（H27.3.7）
「西新小岩地区の地盤高や地形等を踏まえた避難経路」についての勉強と、「河川防災ステーションと緩傾斜型堤防の整備」を前提とした水害に強いまちづくりの施策について
「第 8 回輪中会議（H27.3.28）で発表する勉強会提言」を作成

○ 第 15 勉強会（H27.4.11）
第 8 回輪中会議に参加し勉強会の成果報告を行った感想と、葛飾区と東京大学加藤研究室の共同調査研究「浸水対応型市街地について」の報告

○ 第 16 回勉強会（H27.5.2）
これまでの勉強会の成果を踏まえた勉強会提言の確認と静岡市の津波避難デッキ見学の提案

○ 第 17 回勉強会（H27.6.6）
勉強会提言に含める新小岩地域の輪中化の考えや現状地盤高を考慮した避難ルートの勉強

○ 第 18 回勉強会（H27.9.5）
勉強会提言の柱となる「新小岩地域の輪中化」、「新小岩中学校を浸水しない避難場所にする」、「西新小岩三丁目からの避難経路の整備」の勉強と、津波避難施設見学会の説明

○ 第 19 回勉強会（H27.10.5）
前回勉強会を踏まえた「提言Ⅰ　新小岩北地域の輪中構造への整備」、「提言Ⅱ　新小岩中学の浸水防止策」、「提言Ⅲ　西新小岩三丁目からの避難経路整備」の勉強と、津波避難施設見学会の説明（日程の変更等）

○ 第 20 回勉強会（H27.11.7）
11 月 12 日に葛飾区より「新小岩公園防災高台整備事業」計画の説明があることと 10 月 27 日に荒川 5 区が広域避難対策協議会を設置したことの報告。勉強会提言の「提言Ⅳ　河川防災ステーション整備にあたっての要望主旨」、「提言Ⅴ　関連・付帯要望」の勉強。

○ 静岡市津波避難施設見学（H27.11.20）
清水駅周辺の津波避難施設及び三保・折戸地区の津波避難タワー等を見学し、静岡市防災課職員による、津波高さと避難施設を示した津波避難マップ及び各地区の地形や津波特性及び鉛直避難の考えや方法についての説明。

○ 第 21 回勉強会（H27.12.7）
葛飾区より 11 月 12 日に説明があった「新小岩公園防災高台整備事業」と 11 月 20 日の「静岡市津波避難施設見学」の報告。勉強会提言の「前文」と「提言Ⅳ　河川防災ステーション整備にあたっての要望」、「提言Ⅴ　関連・付帯要望」等の再検討

○ 第 22 回勉強会（H28.1.16）
「提言Ⅴ　生活圏域に係わるその他要望」における帰宅困難者対策と新小岩北地域公共施設整備に合わせた防災対策について勉強

○ 第 23 回勉強会（H28.2.6）
提言の「前文」、「Ⅰ　新小岩北地域の輪中構造への整備」、「Ⅱ　新小岩中学の浸水防止対策」、「西新小岩三丁目からの避難経路整備」、「Ⅳ　河川防災ステーション整備に当たっての要望」、「Ⅴ　関連・付帯する要望」について、最終案のまとめに向けた検討

○ 第 24 回勉強会（H28.3.5）
提言の最終案について確認。勉強会提言を 3 月 15 日に葛飾区へ提出する時の役割分担と 3 月 20 日の輪中会議で発表する際の役割分担について検討

○ 第 25 回勉強会（H28.4.2）
勉強会提言を葛飾区に 3 月 15 日に提出したことと 3 月 20 日の輪中会議で発表したことの報告。
新小岩北地域公共施設を水害時の避難施設として多目的利用できるよう葛飾区に要望することを決定。

○ 第 26 回勉強会（H28.5.21）
新小岩北地域公共施設に対する町会要望を、4 月 12 日に葛飾区政策経営部に行ったことの報告。
勉強会提言に対する葛飾区回答案があまりにも総括的で抽象的なため、より具体的な回答を要望することを確認。熊本地震の教訓について意見交換。

○ 第 27 回勉強会（H28.6.4）

勉強会提言に対する区の訂正回答案について議論。各提言に対する回答に訂正されていたため、一部修正の上、勉強会として基本的に受け入れることを確認。

5 月 31 日に行われた区の新小岩北地域公共施設の説明会では、防災施設が具体的に盛り込まれていないため、勉強会として意見書を提出することを確認。

○ 第 28 回勉強会（H28.8.6）

勉強会提言に対する区の訂正回答文を、正式に決定した文書番号付きの回答文として受理することを決定。新小岩北地域公共施設計画について、地元要望を反映させるための地元説明会を開催するよう要望すること決定。

○ 第 29 回勉強会（H28.9.3）

区の正式回答文を、9 月 24 日（土）17 時に勉強会会議室で受理することを決定。新小岩北地域公共施設計画について、区が週末に勉強会に来て説明することが難しいということを受け、9 月 7 日 11 時に区へ赴いて新任部長から説明を受けることを決定。荒川流域 5 区“広域避難勧告”について勉強。

○ 第 30 回勉強会（H28.11.5）

新小岩北地域公共施設整備計画について、区が同施設を 2 階から 3 階にし、防災備蓄倉庫を設置する検討を進めていることを報告。勉強会提言の施策の実現には時間を要するため、大学や中学など今ある施設を一時避難施設として利用できるよう検討すべきとの意見が多く出された。

○ 第 31 回勉強会（H28.12.3）

荒川流域 5 区“広域避難勧告”や区の水防・避難計画で示されている広域避難計画では、地震時水害の対応が抜けており垂直避難が検討されていないのは問題であるとの意見が出された。

○ 第 32 回勉強会（H29.2.4）

勉強会の新しいテーマとして、町会の水害時避難計画を作成することを決定し、地区内で垂直避難が可能な建物を地図上に表すことから始めることを確認。新小岩北地域公共施設整備計画について、区の地元説明会が 3 月以降となるとの報告。3 月 26 日の輪中会議において、勉強会の「今年度の成果とこれから」について渕井リーダーが発表することを決定。

○ 第 33 回勉強会（H29.6.3）

町内の高くて強固な垂直避難可能施設について検討。また、マンションへ垂直避難した場合の避難者への扶助の問題やゴムボートの操作する人材がいないことなどの問題について意見が出された。

町会の低く揺れやすい地盤などの地域特性を考えた場合、万が一の地震水害に備えた避難計画が必要であると認識を改めて共有した。

○ 第 34 回勉強会（H29.9.2）

事務局より「葛飾区における水害時の避難対策について」と「町会避難計画の作成（手順）」

について提案。避難候補施設である区有施設や都営住宅の避難者受け入れ可能容量や耐震性について葛飾区に確認するよう依頼。
次回勉強会の日、事前に町会の垂直避難候補施設を見て回ることにした。

○ 第 35 回勉強会（H29.10.7）
勉強会前に町会を一巡した結果を報告。避難が可能と考えられる高い建物は、町内では都営住宅やマンションが数棟あり、町会外では、病院や中学校、計画中の区の総合施設などがあることを確認した。また、葛飾区より、町会内の区有施設の耐震性は、児童会館以外確保されていることや体育館の天井についても落下防止策が図られている旨の説明があった。また、学校や区有施設について備蓄量の説明があった。また、町会から、避難計画について町会の防災部でその必要性を含め相談したいので、防災計画の作成は待ってほしいとの意見が出された。

○ 第 36 回勉強会（H29.11.4）
事務局より、水陸両用バギーカーが全国の消防に導入されていることを紹介。地震時浸水深図の表示方法と町会における扱いについて議論。区施設への自主避難について議論。

○ 第 37 回勉強会（H30.2.3）
葛飾区防災課長より、江東 5 区協議会で検討中の広域避難計画の考えについて説明。葛飾区の洪水時の避難指示の基準について議論。町会全体の防災意識が高まらないことについて議論。
地震時浸水深図の数値の計算根拠を分かりやすく示した資料を次回勉強会までに用意することとした。

○ 第 38 回勉強会（H30.3.17）
来る輪中会議へ町会メンバーの参加を要請。地震時浸水深図の数値の計算の根拠と方法について資料をもとに説明。町会メンバーから町会の防災意識が高まらないため、地震時浸水深図を町会に配布できる状況にないことの説明。
これまでの勉強会活動を通し、防災上の課題を学び、区への提言や計画中の新小岩北地域公共施設に防災機能を持たせるなど一定の成果があったが、町会全体に防災活動の輪がすぐには広がらないので、活動を一時休止したいとの意見が町会メンバーからあり勉強会を一時中止にすることなった。

勉強会は、検討の成果として、新小岩公園の高台化の意義や必要性について、葛飾区や荒川下流河川事務所へ要望するとともに輪中会議で勉強会の提言を発表してきました。その結果、平成 27 年 12 月の「新小岩公園防災高台整備事業」の実現化のきっかけをつくりました。さらに、活動の集大成として平成 28 年 3 月 15 日には葛飾区へ勉強会提言を提出して平成 28 年 9 月 24 日に葛飾区より回答を受理し、当初の勉強会の目標を達成しました。

その後、勉強会は、提言した多くの施策は、実現に時間を要するため、切迫

している大地震に備え、地震時水害にも対応できる垂直避難を考慮した町会の避難計画作りに取り組みました。また、計画中の新小岩北地域公共施設に、災害時の避難所として一時滞在機能を持たせ備蓄品を備えるよう区に働きかけ、計画に反映されることになりました。

しかしながら、町会の避難計画づくりについては、町会全体としての防災意識が高まるにはなお時間を要することなどから、一時休止することになりました。勉強会事務局としては、今年度、何年かぶりに予定している町会の防災訓練などのシナリオづくりなどのお手伝いをさせていただくなりして、町会全体の防災意識や共助意識を高め、町会の避難計画づくりに結び付られないものかと考えています。

勉強会の様子

勉強会提言書への葛飾区からの回答

明日に伝えるまちづくり ～小中学校での取り組み～

NPO ア！安全・快適まちづくり

NPO ア！安全・快適街づくりでは、地域の小中学校等と連携し、防災・親水まちづくりに関する出前授業や部活動の支援を継続して行っている。ここでは、**これまでの取り組みを振り返る**とともに、**その成果や課題について改めて整理・共有**し、**今後の展開**について考えたい。

1. 出前授業・部活動支援とは

まず、NPO の行っている出前授業と部活動支援について簡単に紹介する。

出前授業は、NPO から新小岩北地区の各保育園・小学校に講師を派遣し、児童や保護者・職員の方に**地域の水害リスクや親水まちづくりの取り組みについて知っていただくことを目的として行っている特別講座**であり、2011 年度から継続して実施している。また、部活動支援は、上平井中学校の「地域防災ボランティア部」の活動を地域の方々とともにサポートする取り組みであり、こちらも継続して支援を行っている。

過去のニューズレターの記録を遡ると、NPO では 2008 年度から葛飾区との協働事業として、パネル展示や防災啓発パンフレットの作成などの事業を行っていたが、**2011 年に発生した東日本大震災を契機に、「いざというときに命を守り生き抜くためには、日頃からの地域や学校との連携が不可欠である」**との考えから、小中学校との連携の深化を目指してこうした取り組みに発展した。

小学校での出前授業の様子

中学生と地域の方 合同の知水資料館見学

表 1 NPO ア！安全・快適まちづくり　出前授業のあゆみ

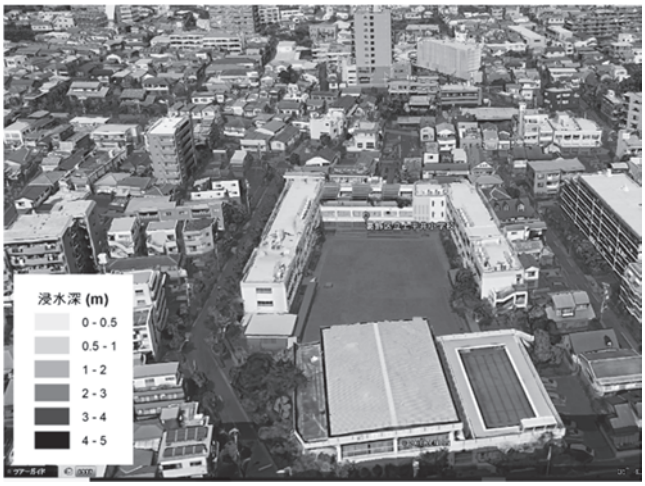
2011 年度	・中村仁氏【NPO ア！】による**初の出前授業**（新小岩中 指導室訪問）
2012 年度	・中村氏による出前授業（松上小・新小岩中） ・塩崎由人氏，マリア・デヴィ氏【加藤研】による**初の学生による出前授業**（松上小 キャリア教育）
2013 年度	・石川金治氏【NPO ア！】による出前授業（上平井小） 「地震・水害から命を守る」「災害を考える」 ・寺島玄氏【NPO 法人あらかわ学会，**新小岩出身**】による出前授業 「西新小岩の水害に関する昔と今」（松上小） ・大成化工（株）**【地元企業】**における**社会科見学**（松上小） ・塩崎氏による出前授業（上平井小 公開授業） 「安全で快適な街を目指して」
2014 年度	葛飾区地域活動団体助成事業として、社会科見学・出前授業・講演会を実施。 ・上平井水門・中川堤防における社会科見学「地域を知る」（二上小 3 年） ・石川氏「大きな地震が来たときあなたならどうする」（上平井小 4 年） ・塩崎氏「安全で快適な街を目指して～水に親しみ水に備えよう～」（上平井小 6 年） ・寺島氏「新小岩のあゆみ～川ができ街ができた～」（松上小 6 年） ・石川氏「大地震がおきたらあなたならどうする」（二上小 4・5 年） ・岡田雅樹氏**【地域**，国立極地研究所**】**「地球温暖化と地域の災害について」
2015 年度	以下の出前授業を実施。**保育園での保護者・職員向けの講座**や、**大学（加藤研）と地域の講師の連携による合同授業**を初めて行う。 ・中村氏「大水害時の避難について」（うらら保育園） ・中川榮久氏【地域】，塩崎氏，南貴久氏【加藤研】 「安全で快適な街を目指して」（上平井小 4 年・6 年，松上小 3 年） ・寺島氏「新小岩の今昔と水害について」（松上小 6 年，二上小 6 年）
2016 年度	以下の出前授業を実施。 ・中村氏「大水害時の避難について」（うらら保育園） ・中川氏，竹本利昭氏【地域】，塩崎氏，南氏，金池潤氏【加藤研】 「地域の防災と浸水と親水について」 （上平井小 4 年・6 年，二上小 5 年，松上小 3 年・5 年） ・寺島氏「新小岩のあゆみと水害について」（松上小 6 年，二上小 6 年）
2017 年度	前年度と同内容の出前授業に加え、**上小松町会からの要望により、地域と連携して次の出前授業を実施**。 ・奈良木亨丞氏【地域】，塩崎氏「地域の防災と浸水と親水について」（上小松小 5 年）

2.「出前授業」で何をやっているか？

出前授業は、表 1 に示したように、NPO 前理事長の故・石川金治氏をはじめ、NPO 理事の芝浦工大・中村先生や東大加藤研の学生などが講師を務めている。授業の内容は講師によってさまざまであるが、ここでは一例として、昨年度に加藤研の学生を講師として上平井小学校 6 年生を対象に行った授業**「防災“も”まちづくりをしよう！」**の流れを紹介する。

授業は、最初に提示する**「葛飾の水害の歴史を知ろう」「地域の災害のそなえを知ろう」「防災“も”まちづくりを知って、水を生かしたまちづくりを考えてみよう」**の 3 つの“めあて”に沿った形で展開する。まず、最近起きた水害事例（関東・東北豪雨、九州北部豪雨）について写真を見ながら、水害の種類や原因について簡単に説明する。そのなかで、外水氾濫（川の洪水）をピックアップし、葛飾区でも起こりそうかを問う。地図や「葛飾郷土かるた」の札を見せながら、葛飾区は大きな河川に囲まれていることを確認し、過去にこの地域も大きな水害に見舞われたことがあることを説明する。カスリーン台風当時の、屋根の上で生活せざるを得なくなっている様子や、いかだで移動する人の様子を写した写真を見せると、児童たちは「これが新小岩の風景なのか」と驚いた様子だった。また、この地域がゼロメートル地帯であるという知識は持っている児童が多いが、それが浸水の長期化につながるということは初めて知ったようだった。

地域のリスクを認識してもらったところで、水害への備えの話に移る。まず水害の情報を得る手段として洪水ハザードマップの説明をする。Google Earth 上で、小学校や児童の自宅周辺で想定される浸水の様子を視覚化して見せると、リスクを実感を持って捉えてもらえたようだった。また、このようなハザードの視覚化は防災アプリ「天サイ！まなぶくん」でも可能であることを伝え、地域の方たちがこのアプリを活用しながら街歩きをして備えを考えている様子を見せた。さらに、輪中会議やボート訓練の様子も見せ、同じ現象が起きても地



域の対応力によって被害の大小は変わりうることから、こうした取り組みが重要であることを話したところ、児童たちは関心を持った様子だった。

つぎに、水は災害時は怖いが、普段は恵みをもたらしていることを説明し、国内外のさまざまな親水まちづくりの事例を紹介する。運河に面した「世界一美しいスタバ」（富山）や、「水に浮く家」（オランダ）などの写真には、「すごい」「行ってみたい」と歓声があがる。そして「みんなの住んでいる葛飾では、何ができるかな？」と問うと、たくさんの児童の手が上がり、「水切りの世界大会を開催する」「1 回 500 円でボートに乗れるようにする」「川魚のフードフェスティバルをやる」などの小学生ならではの柔軟なアイディアがたくさん出た。

最後にまとめとして、**「水辺をどう使うかはみんなの工夫次第だから、防災“も”考えながら将来の街を一緒に考えよう！」**というメッセージを残して終える。

3.「部活動支援」で何をやっているか？

上平井中学校では、地域の方々とともに行ったワークショップを契機に、かつての「理科部」の活動をサポートする形で連携がはじまった。その後、「地域防災研究部」「地域防災ボランティア部」と名前が変遷していったが、地域の方や大学院生による水害についての講義や、地域と合同の防災施設の見学やまち歩きの実施などの支援を続けている。

昨年度の活動を例として挙げると、夏季休暇中に

・中川護岸耐震補強工事 現場見学
・東大・加藤研究室訪問
　（加藤研の学生による水害に関する簡単な講義や大学の研究紹介）
・荒川下流河川事務所の災害対策支援船「あらかわ号」乗船体験
・防災アプリ「天サイ！まなぶくん」を活用したまち歩き
　（水害時の避難場所の確認や、過去の水害を伝える事物の発見など）

といった、NPO や大学ならではの体験学習支援を行った。またその成果を校内の学芸発表会（10 月）や地域の輪中会議（3 月）で発表する際のアドバイス等も行っているが、基本は生徒主体で、自主性を重んじて進める。今年度は、地域のボート訓練にも参加したり、区役所への訪問などを行う予定である。

4. 出前授業・部活動支援の狙いとこれから

学校と連携したこれらの取り組みで狙っていることは、主に次の 3 つがある。

第一に、**子供自身の関心を引き出し、主体的に学ぶことの楽しさを実感してもらう**ことである。防災は、災害現象そのものに着目すれば理科分野だが、その対策や地域のまちづくりに着目すれば社会科分野に大きく関係するなど、非常に**総合性**に富んだ題材である。実際、小中学校の学習指導要領を見てみると、防災に関わる学習は理科や社会科をはじめ、保健や家庭科など多くの科目の中

に散りばめられている。

実は葛飾区の小学校では、郷土学習でも川の歴史等について学んでいるようで、子供たちに話を聞くと「荒川放水路は青山士が作った」といった発言も出てくる。防災やまちづくりについての出前授業やそれをきっかけとした家庭学習を通して、学校の各科目で習ったことが自分たちのまちやくらしに深く関係していることを実感すると、学んだことの理解度も高まることが期待できる。

防災に関する個別の知識そのものは、学校の通常の授業でも教えることができるだろう。しかし、あえて我々が講師となって出前授業という形で教えることに意味があるとすれば、**防災という分野横断的な切り口から各教科での学習事項を捉えなおし、子供たちにとって身近な地域の現場で行われていることとの結びつきを感じて関心を深めてもらう**ことにあるのではないか。この点を踏まえて、今後も学校側との連携を深めながら授業内容を工夫していきたい。

第二の狙いは、**親世代への防災意識の波及**である。一般に、小中学生の親世代は仕事や子育てに追われ、地域との関わりを持ちにくいとされる。地域で防災の啓発活動を行っても若年層がなかなか集まらないのは、全国共通の課題である。そこで、まず**小中学生に防災についての授業や活動支援を行い、その内容を家に帰ってから家族に話してもらうことにより、地域のリスクや防災活動について知る機会を持っていただく**ことを期待している。一部の出前授業においては、「もし荒川の堤防を越えて浸水したら… あなたはどこに、どのように避難しますか？」というワークシートを配布し、児童に家族と水害時の避難について話しあってもらえるような工夫をしているが、この活動に対する親世代の反応を知ることは、今後の課題である。

そして第三の狙いは、**地域内での防災まちづくりの継承**である。前号で加藤先生も述べている通り、小学校の出前授業で知識や意識の底上げ、中学校で部活動による主体的な研究活動と、約 7 年にわたって取り組みを続けており、確実に未来の地域を担う人材を育成する土台が組みあがってきている。高校生、大学生、そして社会人になってからの受け皿の仕組みを作ることができれば、彼らは地域の現場で実際に大いに活躍する人材となってくれると確信している。

NPO のメンバーや大学が講師やサポート役を務めることも必要だが、地域で**将来にわたってこの活動を継続していくためには、地域の中に自立的な支援体制を確立していくことが大切**だろう。実際近年では、地域の方が出前授業の講師を務める、あるいは地域の側から手を挙げていただくようなケースも生まれてきている。地域人の話は臨場感あって人気である。地域の**「明日」**を担う子供たちを育てるため、地域の方を主役とし、学校や行政の方々とタッグを組んで、**防災の重要性・総合性やまちづくりの楽しさを次の世代に伝えていきたい。**

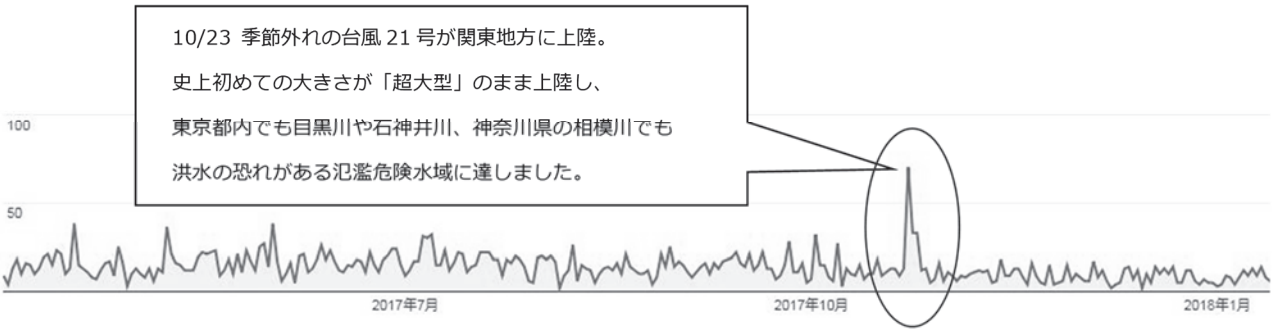
文責：南　貴久　監修：渡邉　喜代美・塩崎　由人

NPO ア！のホームページ状況について　古川 修

NPO 会員の古川修です。「NPO ア！安全快適街づくり」のホームページについて、最近の状況含めて運用状況をご報告いたします。

◎本年度の Web ページのアクセス状況について

下記グラフは 2017 年 4 月~2018 年 3 月 31 日のアクセス数の推移を示しています。



超大型の台風が近づき、都内の河川が氾濫危険水域に達していき、関連情報として「荒川氾濫」のシミュレーションの情報がニュースでも流れておりました。東京下町に住む人たちが、浸水に対する情報を求めていたことが数字に表れています。 Web ページでも引き続き安心安全な街づくりのために、幅広く有益な情報を増やしていければと思います。

「天サイ！まなぶくん」の広がりについて　**（杉並区版が平成 30 年秋リリース）**

「天サイ!まなぶくん葛飾版」のアプリをリリースして 5 年半。ここ葛飾から発信された「防災情報を可視化するアプリ」の広がりについて報告いたします。

地震被害シミュレーション AR すぎナビ （杉並区版）について

※画面は開発中のものです

地震・火災の被害想定と避難所情報を AR で表示するもので「天サイ！まなぶくん」の AR 技術が使われております。今後も広く提案を進めていければと思っています。

あらかわ号 船上学習報告 2017

山上　忠
NPO ア！安全・快適街づくり

今年で 6 年目と恒例になった上平井中学校地域防災部生徒・東京大学加藤研究室・地域町会・NPO ア！安全 4 団体コラボのあらかわ号船上学習が行われました。夏休み猛暑の中でしたが、定員いっぱいの 28 名が国交省の災害救助船あらかわ号の快適な船内と爽やかな川風の中、ゼロメートル地帯の現状を改めて体験学習出来ました。以下に詳細を記します。

日時　：平成 29 年 8 月 9 日（水） 12 時 ～ 16 時
学習内容：講師コーディネート及び資料作成と提供
講師　：東京大学大学院加藤孝明研究室　　南貴久
荒川知水資料館スタッフ
国交省荒川河川事務所スタッフ
NPO ア！安全・快適まちづくり　渡邉喜代美、増澤一朗、山上忠

学習スケジュール：

① 荒川知水資料館集合（講師　南・渡邉）
館内にて昼食と配布資料を基に洪水の現象解析説明とその脅威など座学

② 荒川知水資料館学習（講師　南・国交省）
荒川の全体像・荒川建設の歴史・河川の恩恵・洪水の脅威と対策など

③ 新旧の岩淵水門学習（講師　国交省）
水門の歴史・構造と役目・過去の洪水の跡など

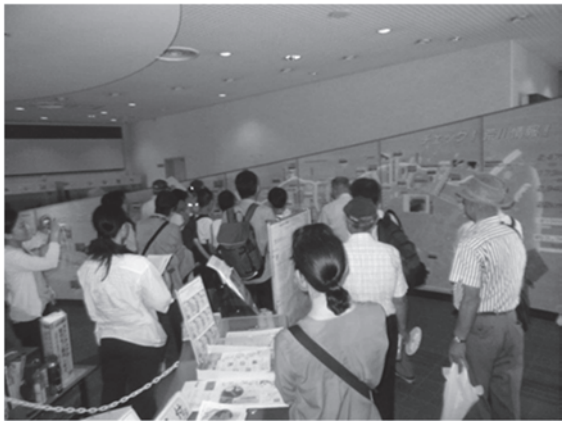
④ あらかわ号乗船　岩淵水門～番所船着場クルーズ（講師　国交省）
あらかわ号の役目・仕様・性能

⑤ 船内学習（講師　南・渡邉・国交省）
河川水面から見るゼロメートル地帯、京成本線架替事業、綾瀬排水機場、小松川地区高規格堤防など

⑥ 荒川ロックゲート作動体験と学習（講師　南・国交省）
ロックゲートの意味・機能と働き・その必要性など

⑦ 番所船着場にて上陸（講師　南）
番所船着場の歴史学習・記念撮影など

参加者：上平井中学校地域防災ボランティア部部員、先生、PTA など　8 名
葛飾区新小岩北地区町会員など　15 名
東京大学加藤孝明研究室　大学院生、研究生など　2 名
NPO スタッフなど　4 名



荒川知水資料館内学習
（講師　南・国交省）

新旧の岩淵水門学習（講師　国交省）

あらかわ号に乗船

橋をいつもと違う視点から…

船内学習（講師　南・渡邉・国交省）

あらかわ号の前で記念撮影

救援艇「しんすい！まなぶ号」ロゴワッペン制作について　古川 修

NPO 会員の古川修です。「NPO ア！安全快適街づくり」に今回導入された、救援艇「しんすい！まなぶ号」の、しんすい＝親水の名前にふさわしく親しみのあるボートとするべくロゴを制作いたしました。

◎「しんすい！まなぶ号」のロゴが完成！

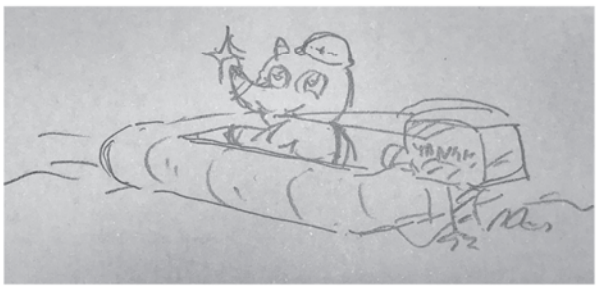
天サイ！まなぶくんを書いた同じイラストレータが書きました。下記**イラストレータのコメント**

・船でかっこよさそうに見えるエンブレムのようなデザインとしました。

・一番下のひらがなの「しんすいまなぶ号」の周りは浮き輪にしました。

・天サイ！まなぶくんはヘルメット姿ではありませんでしたが、今回、防災とつなげるためにかぶせました。

試行錯誤の履歴



※イメージ作成中のラフスケッチ

※イメージをまとめるために組んでみたもの

今後もこのワッペンとともに、広く「しんすい！」をすすめていければと思っています。

「しんすい！まなぶ号」 進水（しんすい）っ！？

NPO ア！安全・快適まちづくり

2018 年 6 月 10 日（日）、「平成 30 年新小岩北地区連合町会合同救命ボート訓練」が中川で行われました。北地区の全町会が参加してのボート訓練は初めてであり、小雨の降る生憎の天気ながら、小さい子供から中学生、大人まで、とても多くの方が集まりました。

NPO ア！安全・快適まちづくりでも、このたびゴムボートを購入し、救援艇「しんすい！まなぶ号」と名付けました。この日はしんすい！まなぶ号のデビューの晴れ舞台となり、ボートの置き場を提供してくださっている大成化工（株）の水上さんのご指導・ご協力のもと、組み立てが完了しました。

いよいよ川へ出陣！と意気込んだところで、なんと船体に穴が開いているのを発見！このままでは“**浸水**”してしまう…とのことで、急いで修復を行いました。気を取り直して、いよいよ着水！エンジンがかかっていよいよ“**進水**”です。最初の運転は山上さん。しんすい！まなぶ号は勢いよく走り出しました。川の真ん中まで来ると空が広く感じられ、爽快な気分です。広大な水面と空との間には、スカイツリーやハープ橋なども見え、まさに“**親水**”を実践することができました。訓練も終盤。そろそろ着岸しようというところで、まさかのガス欠。川のど真ん中で動けなくなり、消防団のボートに“救援”されました。

ハプニング続きで、想定以上に「まなぶ」ことの多い訓練デビューとなりましたが、今後も地域の方の足かせにならないように鍛練しつつ、「しんすい！」の学びにこの「まなぶ号」を役立てていきたいと思います。

文責：南　貴久

監修：渡邉　喜代美、塩崎　由人

初組立記念！NPO メンバーで

進水前に修復することに…

いよいよ川に着水！

山上さんの運転でいざ進水！

ガス欠で救援される…

東京消防庁の取材を受ける

地域の一人一人から避難を考える ―修士論文の報告―

南　貴久
東京大学工学系研究科　都市工学専攻　博士課程１年
生産技術研究所　加藤孝明研究室

私は2017年4月から5月にかけて、東新小岩七丁目町会や内閣府、葛飾区などと合同で行われた「大規模水害からの避難に関するインタビュー調査」に参加させていただき、私の修士研究として広域避難の実現可能性について考察しました。調査にご協力いただいた地域の皆様をはじめ、お世話になった皆様にこの場をお借りして御礼を申し上げるとともに、本稿をもって研究のご報告に代えさせていただきたいと思います。

周知のとおり、葛飾区を含む東京東部では、仮に荒川などの大河川が氾濫した場合には、長期にわたって浸水が継続するリスクがあります。NPOでは地域や大学とともに、葛飾を浸水しても普段通りの生活が継続できる「浸水対応型市街地」にするためのさまざまな検討を行っていますが、これには街の機能を総合的に変えていかなければならないため、実現までにはまだ時間がかかると思われます。現状では、浸水域に多くの方が留まってしまうと、電気や水道が使えない状態で数日から数週間、救助を待たなければならない状態になってしまうことが予想されます。

そのため、現時点での大規模水害への対応としては、①基本は浸水が起こる前に、浸水想定区域外に事前避難を行う ②事前避難を行うのが困難な人や逃げ遅れた人は、近隣の建物の高層階に緊急避難し救助を待つ というのが望ましいと考えられます。

しかし、事前避難の実現にはさまざまな課題があります。まず、避難勧告や指示などの情報が出ても、なかなか避難行動を行わない住民が多いことです。過去の水害事例の調査報告を見ても、「まさか本当に来るとは思わず、避難しなかった」という住民の声が必ず出てきます。また、避難する意思はあっても、仕事上の都合や移動が困難な家族の存在、行き先のあてがない、などの理由により避難をはじめから断念している人や、避難する段階になったらどうせ交通機関が動かないから避難しない、という人も多いことでしょう。

実際、インタビュー調査に先立って行われた、2016年12月の東新小岩七丁目の住民を対象とするアンケート調査では、浸水域内に留まるリスクを冒頭で伝えたにもかかわらず、自宅に留まる、あるいは近隣の小中学校などの浸水域内を避難先として挙げる方が多くいらっしゃいました。しかし、その理由は、さきほど述べたように、災害のリスクを過小評価していることや自分の置かれた状況などの要因がさまざまに絡み合っていることが考えられ、なかなかアン

ケートの調査票からは見えてこない部分が多いと思われます。

そこで、アンケート調査で追加の調査へのご協力に承諾して下さった方を対象に、訪問形式によるインタビュー調査を行うこととなり、水害避難への考え方やその背景について詳しく伺いました。私は 65 世帯の調査のうち、61 世帯に同行し、実際に住民の方に聞き取りをさせていただきました。このインタビューの実施にあたり、私は住民の方の避難意向を、避難の「意思」と「実現条件」に分けて捉えることで、より実効性の高い避難促進策の検討ができるのではないかという仮説を立てました。ここで避難の「意思」とは、水害に関する避難情報が出されたときに、実現性はともかくとして、逃げたいと思うかどうかを表すこととし、また「実現条件」とは、避難を実現するためにクリアしなければならない具体的な課題を表すものとして定義しています。

その結果、住民は下の表のように、①避難可能者 ②説得的避難可能者 ③条件付避難可能者 ④条件付説得的避難可能者 ⑤避難困難者 に分けられました。「説得的」とは、インタビュー開始時点では避難の意思を持っていないが、リスクの丁寧な説明等により、避難の意思を持ってもらうように“説得”することによって、避難が可能になるだろうという意味です。また、「条件付」とは、避難先確保などの実現条件が整えば、避難が可能になるだろう、ということです。⑤には、重い障害を持っている家族がいるなど、行政や地域の支援だけで避難の実現条件を整えるのが困難だと考えられる世帯を分類しています。

よって、当面の目標としては、②～④に分類されている人たちを、いかに①の避難可能者に移行させることができるか、ということになります。

表１　避難可能性の分類とアンケート結果

<table>
<tr><td colspan="3"></td><td colspan="2">事前広域避難の意思</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td>持っている</td><td>持っていない</td></tr>
<tr><td rowspan="3">事前広域避難の実現条件</td><td colspan="2">整っている</td><td>①避難可能者
4世帯（6%）</td><td>②説得的
避難可能者
18世帯（28%）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">整っていない</td><td>解決可能</td><td>③条件付
避難可能者
11世帯（17%）</td><td>④条件付説得的
避難可能者
31世帯（48%）</td></tr>
<tr><td>解決不能</td><td colspan="2">⑤避難困難者
1世帯（2%）</td></tr>
</table>

さて、アンケート時点では、表 1 に示した通り、65 世帯中、避難の意思があり避難の実現条件が整っている世帯はわずか 4 世帯しかありませんでした。これは、避難が難しいと回答した世帯を中心に聞き取りを実施しているために偏っている部分も大きいのですが、インタビュー非対象者を含むアンケートの集計を見ても、約 7 割の方が浸水域内を避難先として検討しているとの結果からも、①に該当している方、つまり何も言わなくてもすぐに域外に避難する方はかなり少ないものと考えられます。

そこで、インタビューでは、改めてこの地域のリスク（長期間浸水が継続する，浸水中は電気や水道が使えずに衛生状態も悪化する，人口密度が高いため救助に時間がかかる，など）を図や写真を使って丁寧に説明した上で、避難の必要性を訴えながら避難に向けた課題の解決策を一緒に検討していく形で進めました。すると、65 世帯中 61 世帯が避難の意思を持ち、かつ適切な支援を受けられれば避難できそうだと思っていただくことができました。

研究では、この避難意向の変化要因を、インタビューの音声を聞き返すことにより分析しました。

まず**避難の実現条件**については、「浸水域内に通勤・通学している」「ペットがいる」「要支援者がいる」「自営業を経営している」「浸水域内に入院・入所している家族がいる」「避難先の当てがない」という 6 つの課題に整理しました。

通勤・通学については、区や国が一斉休業・休校を指示してもらえれば避難しやすいという人が多数でした。

ペットに関しては、自家用車を使った避難が可能な状況であり、かつ避難先がペット受入可であれば、避難できます。しかし、自家用車を持っていない世帯では、親族や近所の人に車を出してもらうように頼む必要があり、避難をより難しくする要因になるでしょう。

要支援者については、やはり自家用車の使用可否や介助可能な家族が迎えに行けるかどうかが鍵となっており、その前提としてやはり一斉休業が重要であることが分かります。

自営業については調査当初は盲点でしたが、「避難に必要なものを買いに来たのになぜ店を閉めてしまうのか」と地域の方に苦情を言われるのが心配だという声がありました。また、工場を経営している方は、取引先との調整の問題もあり、自分の判断だけで閉めて逃げることはできないとのことでした。これらから、水害の恐れがあるときには地域・社会全体でリスクを理解し、逃げることを最優先するという意識を事前に共有しておくことが必要だと感じました。

入院・入所者については、自分の家族の入院・入所先の対応について知らないため教えてほしい、との声が多くありました。普段から緊急時の対応について施設側と話し合っておくことが重要だと思いました。

最後に「**避難先の当てがない**」という世帯についてですが、これは世帯によってかなり状況が異なりました。よくお話をうかがうと千葉や埼玉などに親戚がいらっしゃって、いざというときなら頼れそうだということが分かったり、「これを機会に親戚に頼んでおこう」と行動に移された方もいらっしゃいました。一方で、親戚が浸水域内や遠方にしかいなかったり、付き合いがほとんどないという方も一定数いらっしゃいました。これらの方には区や国が滞在先を斡旋する必要があるでしょう。しかし、プライバシーを確保するため、ホテルやウィークリーマンションなどの民間施設を自主的に見つけたいという方もいらっしゃいました。いずれにしても、さまざまな選択肢を提示することで、「公的避難所に行かなければならない」という固定観念を払拭することで、避難先を柔軟に考えることが可能になる場合が多いことを実感しました。

つぎに**避難の意思**ですが、こちらも様々なパターンがありました。まず、避難を行うかどうかをリスクの大小で判断している方と、そうではない方がいらっしゃいました。

リスクで判断していない方は、「自分は葛飾とともに死ぬ」「自分は足手まといになるから若い人に先に逃げてほしい」など、ある意味で義理・人情によって避難を判断している方や、「よく知っている方に任せてついていくだけ」と、**自分だけでの判断を避け、他者に同調する**方に分けることができました。これらの方には、合理的なリスクそのものの伝達ではなく、「あなたが逃げないと周りの方も心配して逃げられない」など「情には情で」訴えることや、地域内で声を掛け合うような仕組みをつくることが避難意思を持っていただくために効果があることが分かりました。中には、聞き取り中に「自力で移動するのも困難で頼れる家族もいない」と住民の方も我々も諦めモードになって「万策尽きたか…」と思ったところで、よくよく聞いてみるとすぐ近所に息子さん一家が住んでいることが分かった、というケースもありました。「迷惑をかけられない…」と実の息子さんにまで遠慮してしまう方はたいへんお優しい方なのでしょうが、緊急時には遠慮のし合いが悲劇を招いてしまうことがあることから、周りに頼れるときにはどんどん頼った方がいい、ということもしっかりと伝えていく必要があると思いました。

リスクで判断している方については、単に**リスクを認知していなかった**こと（例えば浸水長期化のリスクを知らず、マンションの上階だから大丈夫だと思っていた、など）や、**誤解**（避難と言えば地震と同じで小学校や公園に行くものと思っていた、など）が域外避難の意思を持つことを妨げている場合が多く、丁寧に正しいリスクを伝えることにより、容易に避難の意思を持っていただける場合が多かった印象でした。

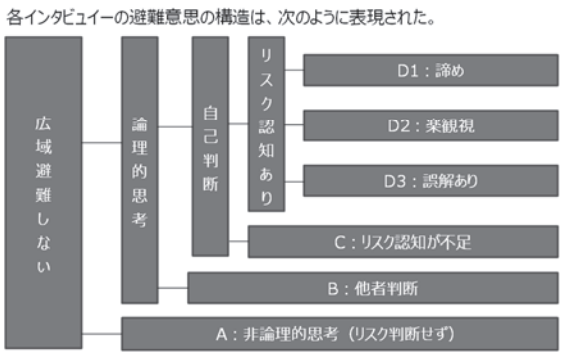
このように、それぞれの方の個別の事情を踏まえて、丁寧にリスクや解決策

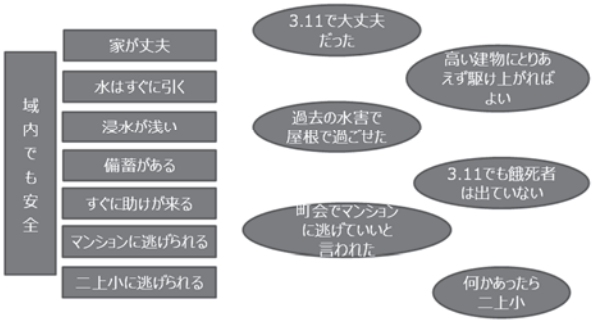
を伝えることにより、多くの方が避難をすることが可能であることが分かりました。このようなきめ細やかなコミュニケーションは、テレビや新聞などのマスメディアが担うことはできず、また行政でもマンパワーに限界があります。よって、町会など地域の中で行う普段のコミュニケーションが担う役割は、非常に大きいと思いました。

もっとも、このような理想的な状況をつくるためには、行政側が浸水が起こるより１日以上前に避難指示を出し、会社や学校の一斉休業を指示し、また避難先のあてが本当にない方向けに公的な避難先を域外に確保する、などの措置を行うことができることが前提であり、すぐに完璧に実行することは難しいと思います。しかし、少しでも多くの方がこのような状況を理解し、災害が迫ったときには動ける人から順にどんどん域外に逃げてもらえるような状況をつくることで、本当に支援が必要な方に行政や地域の支援が行き届くようになることが期待できると思います。

今回の調査では、地域の方から、生活に即した視点からの避難に対する率直な意見を伺うことができ、たいへん勉強になりました。研究室の机上で考えていたら全く考えにも及ばなかったような、一人一人の避難判断が形成される過程をリアルに感じることができ、問題の複雑性を改めて実感しました。

また、避難の主体はそれぞれ異なる人間であり、人々の行動の総体として起こる避難現象の中にも一人一人の考え方や事情といった背景があることを抜きに議論しては、問題の本質を見失うと感じました。かといって、個別の視点だけで見ていては解決し得ない問題も多く、両者の折り合いの中でよりよい解を皆で探していくことが、「安全・快適な街」を実現するための唯一の方法なのだろうと思いました。





注目されてます！新小岩北地区の取り組み

NPO ア！安全・快適街づくり

防災学習ツールが多様化

防災学習ツールが多様化している。災害の疑似体験ができる施設から、スマートフォンのアプリ、遊びながら学べる卓上ゲームまで。「難しくて取っつきにくい」という防災のイメージは、すっかり「今は昔」だ。

●被害を可視化

東京都葛飾区の新小岩北地区は、荒川と江戸川に挟まれた「海抜0㍍地帯」。ここを拠点に活動するNPO法人「ア！ 安全・快適街づくり」（成戸寿彦理事長）は2002年の設立以来、地域の人たちとともに防災学習に取り組んできた。地理的な事情から特に重視するのが、洪水や高潮に対する意識の向上だ。

成戸さんは「地域にどんな危険があり、いざという時にどう対処すればいいかを住民が具体的にイメージすることが、最も大事なことの一つ」と話す。東京大の研究所と13年に共同開発した無料防災アプリ「天サイ！ まなぶくん」は、誰もが水害を「具体的にイメージ」できるアイテムになった。

現実世界に仮想空間が重なり合う「拡張現実」（AR）の技術と全地球測位システム（GPS）を搭載した。子どもが通う学校や自宅など調べたい場所を設定すれば、洪水や高潮による浸水被害がどの程度か、立体的に視覚化される。法人メンバーの一人が自分のスマホで現在地を設定し、記者に見せてくれた。液晶画面には、人型図の頭頂部のはるか上で水面がゆらゆら揺れている映像と、「浸水深+5・0m」の文字。水害の規模がありありと想像でき、背筋が寒くなった。

同法人によると、アプリを使った人たちからは「分かりやすい」と好評で、特に子どもに人気だという。成戸さんは「アプリによって、若い世代も防災に興味を持ってくれるようになった」と顔をほころばせる。

2018 年 5 月 4 日（金）
毎日新聞 朝刊 12 面【くらしナビ】

毎日新聞の防災学習ツール特集で、浸水エリアが視覚的にわかる AR アプリ「天サイ！まなぶくん」が紹介されました！

建設工業新聞の牧野記者が輪中会議の取材にいらっしゃいました。
新小岩北地区の取り組みに興味を持ってくださったとのことで、早速コラムとして掲載してくださいました。本格的な記事が今後掲載予定とのことです！お楽しみに。

回転窓

東京は今週に入り春らしい陽気が続く。暖かな日差しが降り注ぎ、ちょっと外に出てみようかと思いたくなる気候になった。行楽シーズンの始まりは花見。東京都葛飾区にある新小岩地区の町会では、ボートに乗って川から桜を楽しむそうだ▼ボートを備えているのは防災が目的。ゼロメートル地帯に位置し、河川堤防が決壊してしまうと浸水期間が数週間に及ぶ可能性があり、エンジン付きゴムボートを購入した▼運転に慣れておくため6月に周辺の町会と一緒に訓練を行うそうだが、堅苦しい行事だけではなかなか人が集まらない。「遊びの要素を取り入れて参加してもらうことが、訓練にもつながる」と、水上の花見を思い付いた▼危険があることは認識しつつ、自然を楽しむ姿勢も時には必要。水害を恐れているばかりでは、せっかくの豊かな水辺がもったいない。楽しみながら川の姿を見ておき、地形などを把握しておけば、もしもの時の助けになる▼同地区では、水害対策などを地域全体で話し合う輪中会議も開いている。一つ一つは小さな動きだがその積み重ねは人のつながりを育み、大きな防災力になるのだろう。

2018 年 3 月 29 日（木）
建設工業新聞 1 面
コラム【回転窓】
http://www.decn.co.jp/?p=98629

表紙・裏表紙の写真について

NPO ア！安全・快適街づくり

表紙

①古川ジュニア・恵吾くん（9 歳）が中川の親水テラスを疾走する弟・翔吾くん（4 歳）を撮影♪　②中川でこんな大きな魚が釣れるんです（地域人提供）
③かつて学生が考えた 50 年後の新小岩北地区．水と緑にあふれる街を構想．
④夕日に染まるスカイツリー（地域人提供）

表紙のウラ

⑤・⑥大学を中心に検討している浸水対応型建築物のイメージ（東京大学 今井研究室）．浸水時には長期間の避難が可能であり，平時には水に親しめる．
⑦～⑪建設されたばかりの葛飾区役所総合庁舎の写真（1962 年）（JA+U ホームページより）．この庁舎はなんと元祖・浸水対応型建築物．水害に備えて高床式の構造となった．水をとりいれたデザインもかっこいい．　⑫荒川が氾濫した場合の市街地の様子を Google Earth 上で表現．1～2 階部分が浸水…．浸水に対応した市街地を目指したい！　⑬～⑯6 月 10 日に行われた新小岩北地区連合町会合同救命ボート訓練（古川氏撮影）．NPO ア！のボートもデビュー．しかし，ボートに穴があくハプニング！その場で穴を補修して（⑭），なんとか進水（⑮）！しかし，その後，まさかのガス欠で川の真ん中で立ち往生…．消防団ボートに救助され，けん引してもらった（⑯）．何事も実践してまなぶことの大切さを再認識！

裏表紙のウラ（編集担当・塩崎の私事放談）（写真は塩崎撮影・提供）

⑰・⑱5 月吉日，岡山県倉敷市美観地区での花婿・花嫁の舟入りの様子．実はこの花婿は塩崎．美観地区の観光客からも祝福を受けて気持ちがいい．中川でもこんなことができないか？　⑲・⑳6 月土曜日の昼下がり，(新婚旅行で訪れた) スウェーデン・ストックホルムでは，水着姿の市民が水辺を楽しんでいた．　㉑～㉖6 月平日・月曜日の夕方，デンマーク・コペンハーゲンでは，仕事を終えた人々が水辺に集まる．ボートやカヌーで水上を行く人，水辺でくつろいだり，おしゃべりをする人．それぞれのスタイルで水辺を楽しむ（㉑～㉓）．水辺近くの芝生の上では，老若男女が集まり，家族と，友人と，恋人と，ピザやワインを持ち寄り楽しむ．ギターを奏でる者，川で泳ぐ者もあり（㉔・㉕）．貸しボートに乗り込み，水上で家族団らん，パーティー（合コン？）を楽しむ人々．貸しボートは大人気！満員御礼の売り切れ状態（㉖）．　㉗アイスランドの山の上から．（写真左の）氷河から溶け出した水が河となり，海に流れるまでを一望．人は大きな自然の中で生きていることを実感．　倉敷・ストックホルム・コペ

ンハーゲンでの経験を通して勝手に考えたこと．「中川七曲りで出会って，七曲りで結婚して，七曲りの近くで暮らしたくなる」ような，“ロマンスが生まれる”まちづくり・かわづくりなんてどうでしょう？

裏表紙

㉘とても素晴らしい中川七曲りの眺望（地域人提供）　㉙赤羽岩淵付近にある荒川・既往洪水の水位表示（南撮影）　㉚・㉛子供たちにも大人気のボート訓練（㉚古川氏撮影 ㉛塩崎撮影）　㉜・㉝NPO ア！のボート．その名も「しんすい！まなぶ号」(㉝南提供)　㉞中川の護岸を強化する工事も進行中（南撮影）㉟荒川下流のまちを守ってきた旧岩淵水門（南撮影）　㊱あらかわ号と新小岩北地区の中学生・大人たち（山上氏提供）．川からまちを見ながら，浸水と親水について考えている．

文責：塩崎　由人

NPO ア！安全・快適街づくり　～葛飾区新小

新小岩北地区での取り組みの概要

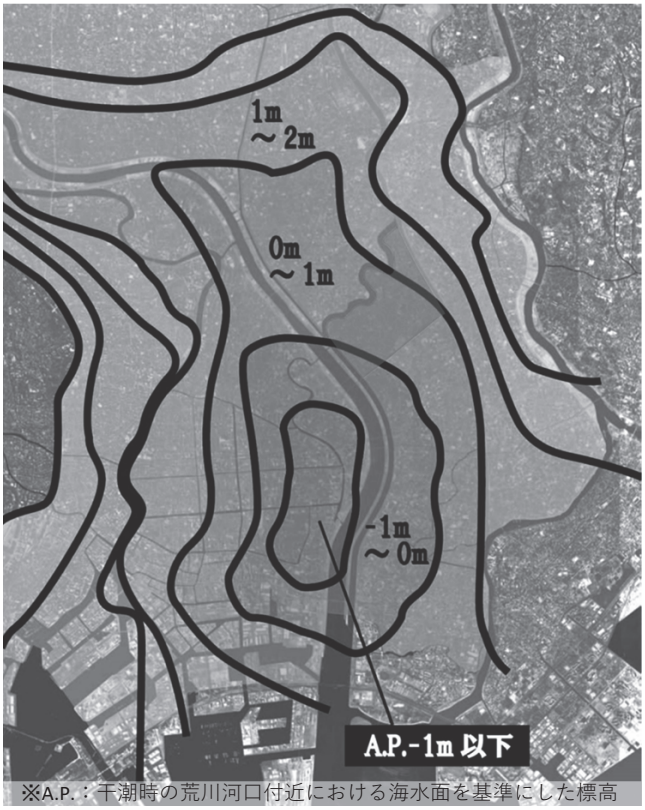
広域ゼロメートル市街地（ゼロメートル地帯に広がる市街地）は，水害発生時の避難や被災後の復旧・復興に大きな課題を抱えている．

広域ゼロメートル市街地に位置する葛飾区新小岩北地区では，新小岩北地区連合町会，当NPO，葛飾区，専門家など，多様な主体が協働して，「**防災“も”まちづくり**」によって，大規模水害に備える取り組みを進めてきた．

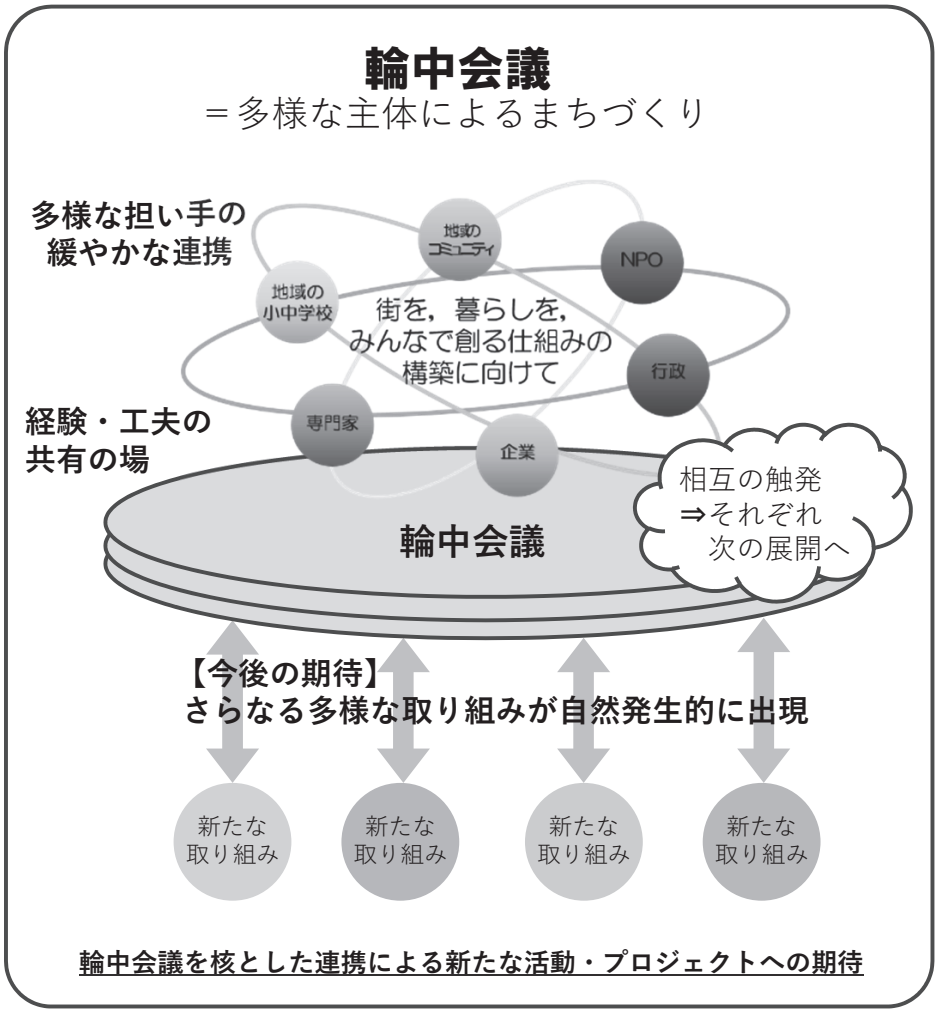
新小岩北地区では，定期的に，多様な主体が一堂に集い，それぞれの取り組みにおける経験や工夫を共有する「**輪中会議**」を開催し，次の展開を話し合っている．

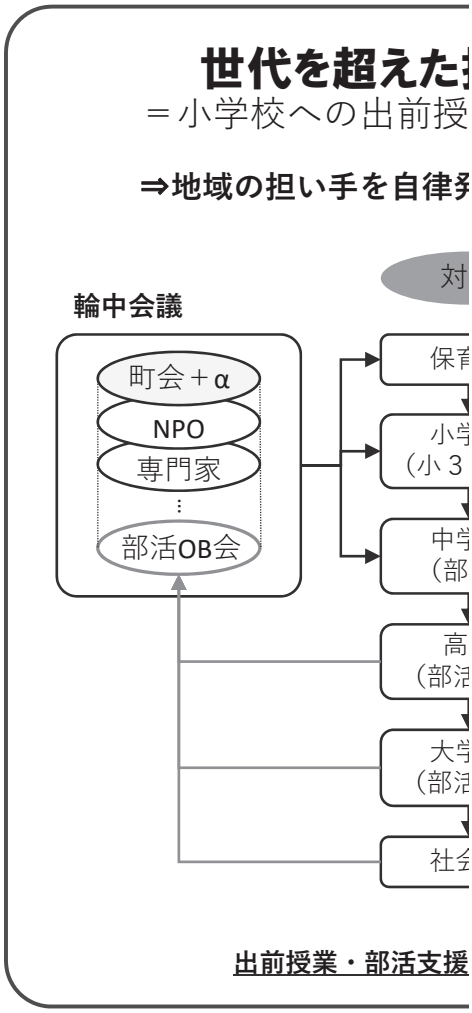
世代を超えた持続性を創出するために，当NPOは，大学，地域と協働して，小学校への出前授業や中学校の部活支援も行っている．

浸水への備えを有し，かつ，河川の恵みも活かした「**浸水対応型市街地**」を長期的に形成する方法についても議論を始めようとしている．



※A.P.：干潮時の荒川河口付近における海水面を基準にした標高





岩北地区における取り組み～

作成：NPO ア！安全・快適街づくり
東京大学 加藤孝明研究室

たとえば
豊かな暮らし＋親水まちづくり＋高齢社会対応＋防災＋色々 ← も

「防災まちづくり」

防災**“だけ”**のまちづくりではなく，
防災**“も”**含めた**総合的な視点**で取り組むまちづくり

防災**“も”**まちづくりを持続的に進めるためのキーワード ４＋１

①総合性
- 防災以外の地域課題，他の目的もあわせて取り組むこと

②内発性
- 自分たちで必要だと思うから，やりたいと思うから取り組むこと

③自律発展性
- 取り組みの内容が雪だるま式に膨らんでいくこと

④多様性
- 参加者の立場やキャラクター，参加組織，活動内容が多種多様であること

＋

⑤市民先行・行政後追い
- 先行的な市民の取り組みを，後から行政がきちんとサポートすること

持続性の創出

業・中学校部活支援

発展的に育む循環の構築

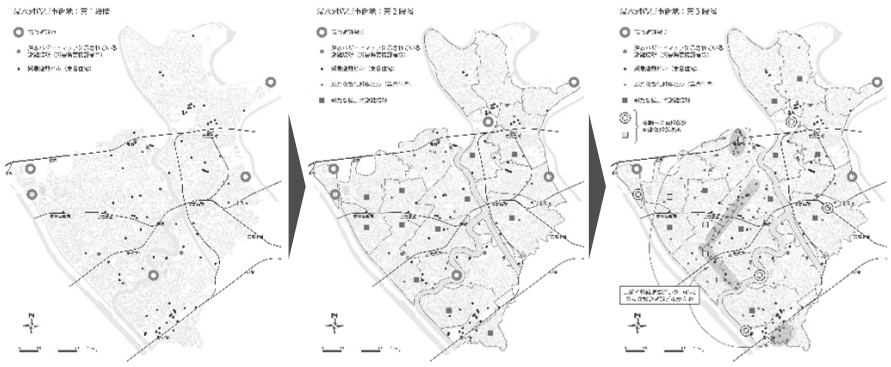
象	効果
育園	親への周知
学生（～６）	知識・意識の底上げ
学生（活）	主体的な学習 ⇒地域の担い手へ
校（岩OB）	
学生（岩OB）	
会人	

が目指すべきあり方

浸水対応型市街地の検討

＝水害リスクと賢く共生する親水都市へ

人命の安全を確保できる街　**最低限の被災生活ができる街**　**浸水対応型市街地**



浸水対応型市街地を形成する長期的戦略の検討

「浸水」も「親水」も

新小岩北地区における活動の系譜 ～防災“も”まちづくり～

作成：塩崎庄

知る ≪情報・経験を共有する≫

考える ≪対策を検討する≫

2002 ～ 2005

第１～５回ワークショップ

地域の水害リスクや行政の防災体制の現状を勉強した。それらを踏まえ、水害発生時に備えた自助・共助のあり方、被災生活のイメージ、水害に強い市街地の目標像を議論・検討してきた。

2006 ～ 2009

ワークショップ

- 第1回 2006年12月
- 第2回 2007年1月
- 第3回 2007年4月
- 第4回 2007年12月
- 第5回 2008年2月
- 第6回 2009年4月
- 第7回 2009年5月

町会の方がGISを活用して、町会の人たちと水害リスク情報を共有

2010

西新小岩周辺地域における安全・快適街づくり勉強会

町会、NPO、専門家、葛飾区、東京都、国から成る勉強会を立ち上げ、広域ゼロメートル市街地における水害対策の検討を行った。検討の結果として、**①安全避難高台の確保**、**②浸水対応型建築物の整備**、**③近隣継続計画**、**④輪中共同体会議の設立**、の4つの方向性が共有された。

2011

- 第8回 2011年2月
- 第9回 2011年3月

地域の大人と中学生がともに地域の水害リスクについて学習

世代を超えた持続性の創出

新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会の設立

2012 ～ 2013

安全・快適まちづくり輪中会議

- 9月 第1回 「持ち寄りの共助」
- 10月 第2回 「持ち寄りの共助」
- 12月 第3回 「わからないことをなくす」
- 2月 第4回 「iPadで地域を観察する」
- 3月 被災地訪問 宮城県南三陸町

2014

- 2月 第5回 「経験の共有」
- 3月 第6回 「これからの協働のあり方を考える」
- 10月 第7回 「高台化のあり方を考える」

2015

- 3月 第8回 「経験を共有し、深め、輪を広げる」

2016

- 3月 第9回 「地域の新たな状況を共有し、未来を考える」

2017

- 3月 第10回 「経験を共有し、未来を考える」

2018

- 3月 第11回 「第11回 「親水・浸水×まちづくり×ひとづくり」

ヨ人・渡邉喜代美（NPOア！安全・快適街づくり）

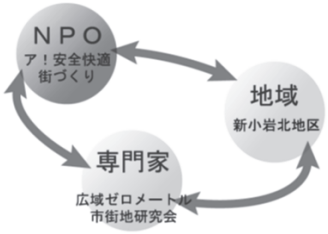
多様な主体による取り組み

協働体制をつくる

研究する（専門家・大学）

俯瞰する

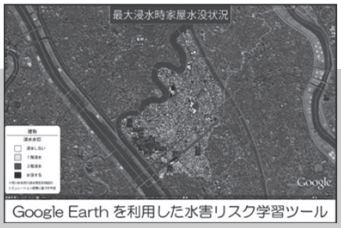
ワークショップ開始時



・ワークショップの支援

・水害リスクに関するデータの作成

・水害リスク学習ツールの開発

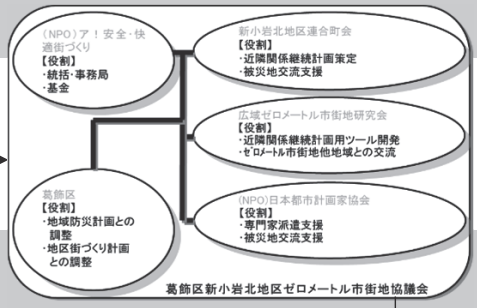


Google Earth を利用した水害リスク学習ツール

2008年
5月 シンポジウム「大規模水害に備える」
10月 全国まちづくり会議 in 恵庭

2009年
9月 全国まちづくり会議 in 川崎
パネル展示

新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会



6月 国際交流イベント
「水害に備える安全・快適まちづくりシンポジウム」
10月 全国まちづくり会議 in 熊本

2011～2013年度
浸水対応型市街地研究会

- 必要な避難空間の推計
- 高台、浸水対応型建築物のあり方の検討
- 浸水対応型市街地の形成戦略の検討

1月 国際交流イベント
全国まちづくり防災フォーラム

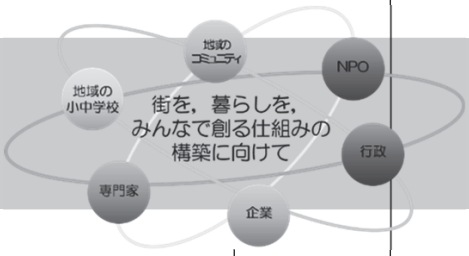
10月 全国まちづくり会議 in さいたま

輪中会議

3月 シンポジウム
「街を、暮らしを、みんなでどう守るか」

9月 全国まちづくり会議 in 神戸

現在の協働体制

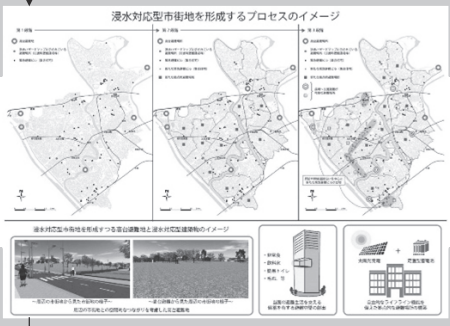


・防災アプリの開発
「天サイ！まなぶくん」

3月 シンポジウム
「大規模水害に備えて街を、暮らしを、みんなでどう守るか」
10月 全国まちづくり会議 in 長岡

3月 シンポジウム
「これからの協働のあり方を考える」

10月 全国まちづくり会議 in 北上



10月 全国まちづくり会議 in 東京

水辺ルネサンス構想（仮称）の検討

11月 三氏を語る会
「地域のこれからを語る」

浸水対応型市街地の検討
～水害リスクと賢く共生する親水都市へ～

9月 シンポジウム「災害から学ぶ」
第一部　カスリーン台風の記憶と経験の共有
第二部　水害リスクと賢く共生する親水都市へ
10月 全国まちづくり会議 in 横浜

多様な主体に

世代を超えた持続性の創出

NPO

町会

小中学校

2002 ～ 2005

2002年
NPOア！安全・快適街づくり設立

2005年
水位表示ポールの設置

ワークショップの主催

町会独自の取り組み

2006 ～ 2009

2007年11月
ボード乗船下船・親水体験
「葛西海浜公園へ行こう」

2008年3月
「川から街を見る」

2009年11月
松戸市21世紀の森と広場への避難訓練
西新小岩3丁目公園での炊き出し訓練

2010

避難用ボード使用訓練

2011

ゼロメートル市街地協議会の運営
・シンポジウムの企画
・輪中会議の運営

小中学校での出前講座

水害も考慮した
避難所運営会議

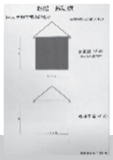
上平井中学校
地域防災ボランティア部
の取り組み
（NPO・大学も支援）

2012

水害を想定した
避難訓練の実施

2013

赤旗白旗救援訓練



2014

民間マンションとの
水害時一次協定締結

中学生と共同で防災訓練

スタンドパイプの練習会

2015

2016

内閣府・災害避難カード
ワークショップ

（東新小岩7丁目町会、
内閣府、葛飾区、
NPO、大学）

防災マップの作製

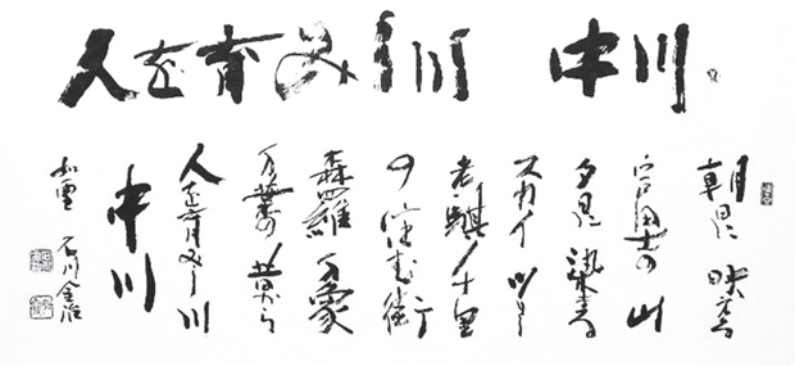
2017

2018

よる取り組み

PTA	福祉施設 民生児童委員	地域の有志	行政
			2007年～ 洪水ハザードマップの配布（区） 2009年 区民や事業者等への水害出前講義の開始（区） まるごとまちごとハザードマップ（国）
			都市計画マスタープランの改訂による 高台避難場所の位置づけ（区） 「事業継続計画作成のすすめ」 を作成（国）
			「水害時における民間集合住宅との 一時避難締結に係わるガイドライン」 を作成（国）
ふたがみこどもまつり でのボート体験 	松上小学校への避難訓練 （たつみ保育園） 東京都認可保育園 BCP作成の義務化	水害時避難用高台整備勉強会 （西新小岩3丁目有志） おれたちの朝旅 	防災アプリ「天サイ！まなぶくん」 配信開始（区） 高台整備事例：東京理科大 葛飾キャンパス 1.5m程度の盛土を実施
	アレルギーガイドライン 非常食アレルゲン除去食 の購入 高齢者向けの防災講演会 水防法改正の説明会		洪水緊急避難建物の指定（区） 避難確保計画のひな型作成（区） 防災啓発DVDの作成（水害編）（区） タイムラインの検討（国）
			洪水緊急避難建物への備蓄物資配備（区） 水害に強い建物を促進する街づくりルール検討中（区） 消防団へのゴムボートの貸与（区） 江東５区大規模水害対策協議会
		勉強会から区への提言 区からの回答の受理 	要配慮者利用施設を対象とした水害時の 避難計画作成支援（区） 新小岩公園の高台化へ（区） 内閣府・災害避難カードワークショップ

表紙の書の紹介　「人を育みし川　中川」　　作詞・書：如雪　石川金治



書の作詞は石川金治「人を育みし川、中川」の詩文全体は、北新小岩地域を流れる、中川の豊かさを、いつも感じているので、その讃辞です。この“老キ千里”の文言は、私達と一緒に活動の屋台骨を支えている人の顔を想像しやすい文言を探した結果です。また作詞のもう一つの動機は、事務局会議終了後、渡邉さんと塩崎さんと３人で、夕日の中のスカイツリーを見た時の感動が大きかったから、その感動が原動力となって、作詞をしましたと石川さん。渡邉が老騏、老驥とはと問うたら、馬小屋に寝ていても志は千里にあり、老騏、老驥は個性あふれる表現という。石川さんは千の風にのって逝ってしまったが書は生きている。中川があるかぎりしばらく表紙に登場いただく。

♪24 号　編集後記♪

2017 年 9 月、カスリーン台風から 70 年。災害を忘れず未来に向き合うシンポジウムを開いた。今号では、NPO ア！15 周年とカスリーン台風 70 年を記憶として開いたシンポジウムも特集。記録は大事。2016 年は鈴木町会長、徳倉会長、石川理事長と惜別するも 3 人の問題提起は、今や活動の中で生きている。2018・3 月の輪中会議は進行役のリニューアル。次世代がバトンタッチして新鮮。若い世代も、地域人も、小中学生も入り混じって、地域先行、自律発展。再び中学生の発表と意見から元気をいただいた。未来の大人が育つことがうれしい。多様化と次世代連携そして多層化が一歩前へ。未来を考える柔軟性は、さらに高まると感じている。世代間連携で持続可能“しんすい！”都市へ。新たな進展の予感がリアル！である。実におだやかにコラボレーションして、輪中会議で、さらに刺激をもらう。参加者の皆さんに敬意を表します。2011・3・11 東日本大災害から 7 年目を超え、人たちのご苦労はいまだ！続いている。九州・熊本大地震も、また切れ目なく起こる水害も、それぞれを理解した上で、人がシェアし合える仕組みをどう創るか、全ての皆に問われている。それぞれの地元は、人の出会いを、つながりを大事に“自分たちの街は自分たちで再生させたい”この思いでがんばっている。体験・情報共有は単に語り継がれるのみならず自律発展へつながってこそ生きる。NPO ア！にとどまらず、柔軟な活動が評価され、自治体消防制度 70 周年記念事業として行われた「自治体消防活性化大会」で中川さんが全国へ報告の機会を得た。出前授業が広がった。勉強会から実践へ進んだ。NPO ア！事務局メンバーは、メディアの取材を受けて活動へのモティベーションもあがった。大学生は活動に参加しつつ論文を書いた。区は都市計画マスタープランで「水害に強いまちづくり方針」を位置づけた。東京都市白書で中川七曲りも地図に入った。“浸水親水”は“しんすい！”で新たな議論を呼び覚ましていくだろう。♪なんと新艇「しんすい！まなぶ号」♪が 6 月 10 日デヴュー。これも楽し。遠くて近い南極報告も加わっていただき、今号もすばらしい総集編となりました。100 ページ超となった冊子重いけどよろしく。そして、NPO ア！も創設から 17 年へ。あ！というまに渡邉も喜寿。みなさんありがとう♪

2018・6　編集責任：渡邉喜代美　　編集協力：塩崎由人・南貴久

「特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり」
〒124－8535 東京都葛飾区西新小岩三丁目5番1号
電話 ／ FAX： 03－3696－7480
ホームページ ： http://www.banktown.org/

S22.9.16
カスリーン台風
S16.7.23 台風
8.07m
S33.9.27
狩野川台風
7.48m
S3.8.3 台風
7.30m
S13.9.2 台風
6.48m
H11.8.15
熱帯低気圧

東新小岩7丁目

しんすい!まなぶ
SHINSUI!MANABU-GOU
しんすい!まなぶ号